



子どもの救いを三位一体で

札幌羊ヶ丘教会
小菅 剛

分級風景

教会学校の分級の風景。先生が子どもたちに「イエス様ってどんな人だと思おう」と質問した。「はい、はい、はい」と手を挙げる元気な子どもたち。先生が一人の元気な子どもに指名すると、「はい、先生のような人だと思います」。教師の目につつすらと涙が滲む。わたしは、こんな夢をいつも抱いている。しかし、これは夢で終わらず、ある教会学校の実際のことである。子どもの救い、キリストに似るようになると日夜努力されて働き人に主が報いてくださるようにと願っている。

ひとり世に

かつて、神戸布引教会の野木源治郎先生とパウロの伝道跡を訪ねる旅をした。私の救いを聞かれた野木師が、「そっか、親戚のM牧師が君を導いたか。M牧師は、家内の甥にあたるが、君を世に出しただけでも彼の生涯は報われた。彼の伝道者生涯は無駄ではなかった」と言われたことを思い出す。子どもの数をつい気にしてしまっが、たった一人の主の僕を世に送りだせたら、それはすばらしいことである。パウロを伝道の舞台に引き出したバルナバ。田舎者D・L・ムーデーを19世紀の偉大な伝道者へと引き出したのは、教会学校のエドワード・キンポルト先生であった。神は、今もそのような教会学校教師を備えておられる。

三位一体で

私は、子どもの救いのために三位一体ブレイを提唱している。救いは神とキリストと聖霊による。救いは聖書と祈りと証人による。子どもの救いのためには、親と教会学校教師と教会の三位一体救霊である（特に子どもがクリスチャンホーム、片方の親がクリスチャンである場合）。教会は祈り、子どもの救いのために敵を。教師は前線奮闘である。親は、教会学校に送り、委ねるが任せっぱなしにはしない。家庭礼拝である。私は、教会学校の子どもが洗礼を受ける日に、親に「心得」を渡している。親自らが見本であり、「洗礼を受けたんだからきちんとしなさい」を言わない、家庭礼拝を持ちましょう、などである。親が、子どもの救いを本人に任せているのは、子どもに悪魔と相談して決めなさいと言っていると同じであると、シエームズ・ブソンは言っている（『思い切ってしつけまじょう』いのちのことは社）。

「わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている」（ヨハネの黙示録2・2）。

「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである」（1コリント15・58）。

牧羊者

目次

巻頭言	1
教師養成講座 旧約聖書丸ごと早わかり(5)	3
天地創造 ≪7月教案≫	9
救いの箱舟 ≪8月教案≫	24
新創造 ≪9月教案≫	36
牧羊ひろば (明石人丸教会)	51
おわりに	52

教師養成講座

旧約聖書丸ごと早わかり(5)

鎌野 直人

はじめに

今回は、旧約聖書の預言書（十七書）を駆け足で学んでいきましょう。

「預言書」は「将来にかかわる予告」と一般的に考えられています。確かに予告やのちに成就するキリストに関する預言も含まれています。しかし、預言書は歴史のある特定の時代の人々に向かって、預言者を通して主が語られた言葉でもあります。そして、預言者の言葉と行いを通して、主が民の歴史に介入されたことを証しています。そこで、本稿では「イスラエルの歴史の中で語られた預言書」の面を強調して概観していきます。

I イザヤ書

1 内容

ユダの王宮に仕えたイザヤが八世紀後半から七世紀初頭にかけて見た幻が記されています。隣国との戦いから始まり、アッシリヤに都が完全に包囲されるといふ激動の時代の人々に、さらにのちのバビロン捕囚後の人々に対して語られた預言がまとめられています。ダビデ王家とエルサレムに對して深い興味を持ち、来るべき王メシヤについての記述も多く含まれ、新約聖書に描かれているキリストの姿を予見している預言書です。

2 分解

(1) 1～12章

イスラエルの聖者である主を侮る民へのさばきと共に、その罪がきよめられ、シオン（エルサレム）が正義の都へと回復されるメッセーじののち（1章）、回復されたシオンへと諸国民が集う幻と指導者たちの罪が記されています（2～4章）。5章以降は、イスラエルとスリヤの連合軍との戦いにおいて主に信頼しようとしぬ王アハズへの警告が中心となります。そして、主に信頼する新しい王の誕生と民に与えられる主の慰めが語られます。なお、神殿で聖なる主に会うイザヤの姿を通して、目が見えず、耳が聞こえない民と、火によるそこからの救いが6章では示されています。

(2) 13～27章

13章から23章にかけては、諸国への主の厳肅なさばきを通して、万軍の主こそが全世界の王であることが提示されています。そして、主のさばきとシオンにおける主の民の回復とその祝宴が、24章から27章にかけて描かれています。

(3) 28～33章

アッシリヤのユダへの侵攻という状況下で、エジプトの保護下に入ろうとする王に、その愚かさとするべき悲劇が指摘されています。さらに、正義と公正をもって国をさばく王の到来が予見され、主こそが世界のまことの王であることがこの新しい王によって示されることが預言されています。

(4) 34～39章

34～35章では、エドムが主のさばきによって荒野と化す一方で、かつて荒野であったシオンが花園となり、民が帰還することが預言されています。36章から39章は、列王下18～20章とほぼ同じ内容です。主への揺るぎない信頼に生きたヒゼキヤ王のゆえにアッシリヤ軍に囲まれたエルサレムが奇跡的に救出されたこと、そして、やがて来るべきバビロンの侵攻の預言が綴られています。

(5) 40～55章

バビロン捕囚の時代の民に向かって語られている預言が集められています。主の言葉が実現に向かって動き出すこと、主こそが唯一の神であり、天地の創造者であること、ペルシャ王クロスを起し、彼によってシオンの回復が実現されること、民の目を主が開かれ、諸国民も主の偉大なわざに気がつくことが記されています。さらに、イスラエルが「主のしもべ」として描かれ、その苦難を通して諸国民の不義のゆるしが実現することが予告されています。「主のしもべ」の預言は新約聖書のキリストの預言でもあります。

(6) 56～66章

シオンに帰還した民への預言が記されています。まず、主との契約を守り、公平と正義を行うことの重要性和主に立ち帰る者へのゆるしが語られています（56～59章）。続いて、回復されたシオンの姿が描かれ、主の恵みの福音が宣伝され、諸国民がシオンに集まることが預言されます（60～62章）。最後には、新しい天と新しい地の創造によってシオンの回復が完成すると一方で、最後まで主に背を向ける諸国民に対しては最終的な審判が訪れる

ことが宣言されます(63〜66章)。

II エレミヤ書、哀歌

1 預言者エレミヤとその時代

ユダ王国末期(七世紀後半)、ヨシヤ王は宗教改革を断行し、王国はその勢いを取り戻しました。しかし、王の突然の死以降、国は大国に振り回され、ついには586年、都エルサレムは陥落します。この激動の時代に預言者の働きを進めたのがエレミヤです。彼は、ベニヤミンの地アナトテ出身で、ソロモン王が追放した祭司アビヤタル(列王上2:26〜27)の子孫、レビ人と考えられます。

2 エレミヤ書の概要

(1) 1章

主はユダをはじめ諸国に主の言葉を告げる働きへとエレミヤを招かれました。彼には、やがて訪れる厳粛な審判の宣告と回復の預言が委ねられます。

(2) 2〜25章

イスラエルとユダが律法を捨て、偶像バアルに従ったため、「わたしは争い、厳粛な審判を下す」と主は宣言されます。だから、主に帰れ、と預言者は呼びかけています(2〜6章)。エレミヤは主に「エルサレム神殿において説教せよ」と命じられました(7〜10章)。律法に従わなくても、神殿のあるエルサレムは決して滅ぼされはしない、と民が誤解していたからです。このままでは、心に割れなく、主に従わない民に審判が下り、エルサレムは荒れ塚となるでしょう。

11〜20章には「エレミヤの告白」と呼ばれる詩がちりばめられています(11・18〜23、12・1〜6、15・10〜21、17・14〜18、18・18〜23、20・7〜18)。

民のために祈ることが禁じられ、アナトテの仲間から敵対され、悪しき者が栄える現実を目の当たりにし、偽りの預言がはびこり、主が平安を取り去られるという現実と直面したエレミヤの主への訴えです。残念ながら、バビロンによって碎かれるという最終宣告が陶器師と陶器のたとえをとおして下されます(18〜20章)。また、諸王、指導者、預言者、祭司への主の断罪と審判の言葉が語られています(21〜25章)。悪いいちじくにとえられた民には主の厳粛なさばきが下り、70年の捕囚が彼らを待っています。

(3) 26〜45章

本物の預言者は誰であるか、が26〜28章のテーマです。長期間の捕囚を預言したエレミヤと二年という短い間にすべての問題が解決すると預言したハナニヤが対決し、ハナニヤの死をもってエレミヤこそ本物の預言者であることが主によって示されます。しかし、審判が確定した時に、エレミヤはエルサレムの回復の預言を語りはじめます(29〜33章)。平安を与えようとする主の計画の実現には70年という時間がかかりますが、計画が実現する時、心のうちに主の律法を記すという新しい契約を主は民と結ばれます(34章参照)

35〜45章には、ユダ王国末期の出来事が描かれています。エホヤキムは、主の言葉を守ろうとも、聞こうともしない王として描かれています。バビロンがエルサレムを再度侵攻したゼデキヤ王の時代、エレミヤは降伏することを勧めました。しかし、王はその言葉に聞き従いません。エルサレムはついに陥落し、逃亡しようとしたゼデキヤは捕らえられます。バビロン軍の指導者ネブザラダン

はエレミヤを釈放し、ゲダリヤをエルサレムの総督と任命しましたが、バビロンに反旗を翻す者たちによってゲダリヤは暗殺されます。一部の民はエレミヤを連れてエジプトへと逃亡していきます。しかし、主はそのエジプトが主の審判をうけること、その一方で最後までエレミヤに仕えた書記バルクが祝福されることを告げられます。

(4) 46〜51章

諸国民への主のさばきの預言が本書の最後に語られています。エジプトへのさばきに始まり(46章)、小国へのさばき(47〜49章)が綴られています。最後にエルサレムを破壊したバビロンの崩壊が預言されています(50〜51章)。これらを通して、主こそ全世界の本当の統治者であるという預言者の信仰が示されています。

(5) 52章

付録のようにではありませんが、エルサレム崩壊の出来事が記されています。列王下25章から取られたものだと考えられます。主の計画は確実に進み、やがて回復が訪れるのです。

3 哀歌の内容

哀歌には、バビロン王ネブカデネザルによってエルサレムの町が陥落したことを覚える、神への嘆きの歌が五つ収められています。「エレミヤの哀歌」とも言われていますが、聖書そのものには何も記されていません。1〜4章はヘブル語のアルファベットを各節の頭文字とした「いろは歌」の形式を取っています(3章は同じアルファベットが三節ずつ)。5章は「いろは歌」の形式はとっていませんが、アルファベットの数である22節あります。それぞれの詩において、エルサレムの町は擬人

化されており、「シオン」「シオンの娘」と呼ばれています。自らの罪が原因であることは認め、神が下された審判は正しいと詩人は認めつつも、その惨状のゆえに、なぜこのようなことが、と主に訴えています。しかし、詩人がこだわっているのは、主のいつくしみです。主はその民を決して捨てられない、という確信があるからこそ、詩人は切実に主へ祈り続けるのです。

III エゼキエル書

1 預言者エゼキエルとその時代

エゼキエルは祭司の家の出身、ダビデの側近であつた祭司ザドクの子孫と考えられます。彼は、紀元前597年にバビロンへエホヤキン王と共に捕囚とされたグループの一員でした。ケバル川のほとりにあるテルアビブに住み、捕囚の民の一人として預言しました。

本書は、ほぼ年代順に構成されており、捕囚の第5年から第25年に至る20年間に預言されたことが集められています。イスラエルへのさばきから始まって、諸国へのさばきへ焦点が移り変わります。しかし、エルサレムの崩壊の報告(32～33章)を境に、預言は回復の幻へと舵を切ります。

2 概要

(1) 1～24章

四つの生きものの幻を通して、主はエゼキエルを主の言葉を伝え、見守る者として反逆の民に遣わされます(1・1～3・21)。預言者は主が命じられた象徴的な行動(瓦にエルサレムの町を書く、人糞で食物を焼くなど)を取り、国の崩壊を民に伝えます(3・22～5・17)。そして、つるぎが送

られ、逃れることができた者たちさえも散らされるという災いの到来が宣言されます(6～7章)。

エルサレムに幻のうちに連れてこられたエゼキエルは、神殿が偶像に満ちあふれ、長老たちがそれらを崇拜している姿を見ます。神殿は汚され、不義で満ちた町は捨てられ、人々は滅ぼされていきます。そして、主の栄光は神殿を離れます。しかし、主は民を見捨ててはおられません。捕囚の地においてさえ主は彼らの聖所となられるからです(8～11章)。このち、象徴的な行動や比喩によってイスラエルの歴史が解説されます。そこでは、バビロン捕囚が不可避なことで、その原因である偶像崇拜が指摘され、自らの世代の罪を悔い改めるように勧められます(12～19章)。

イスラエルの偶像崇拜は今始まったことではありません。出エジプトの時から繰り返されてきたものでした。しかし、主は自らの名を惜しむゆえに厳粛な審判を止められてきたのです。しかし、もう避けられません。そこで、エルサレムの包囲と破壊を嘆いてはならない、と主は祭司であるエゼキエルに命じられます(20～24章)。

(2) 25～32章

諸国へのさばきの預言です。前半(25～28章)ではユダに敵対してきたゆえに下される近郊の国々へのさばきが、後半(29～32章)ではエジプトに対するさばきが宣告されています。

(3) 33～48章

エゼキエルがイスラエルを見守る者として主によって立てられたことが再確認された後(3章参照)、バビロンによるエルサレム崩壊の知らせが預言者の元に届きます。絶望の時です。しかし、こ

れは回復の預言の始まりでもあります。主は、土地、民、王、神殿の再興を宣言されます。民を見捨てた悪しき羊飼いに替えて、正義のダビデの王家を立て、主ご自身がその民を養うこと(34章)、新しい霊によって民を汚れからきよめること(36章)、枯れた骨のように死に汚れた民をきよめて、多くの人を起こすこと(37章)、外国との戦いに勝利し、主の栄光が諸国民に示されること(38～39章)が綴られています。

民と王の回復に続いて、神殿の回復の幻が示されます(40～48章)。かつては偶像に満ちた神殿が(8章参照)、全く新しくなります。ひとりの人に導かれて神殿を巡ったエゼキエルは、かつては去ってしまった主の栄光が東から神殿に帰って来るのを見ます(43章)。祭司とレビ人に神殿の働きが委ねられ、種々のささげものが制定されます。神殿から水が流れ込むゆえに、死海に命が生み出されます。イスラエル12部族に土地が分割され、失われたものすべてが主によって回復されるのです(47～48章)。

IV ダニエル書

1 ダニエル書とその時代

ダニエル書は「預言書」であると理解されています。しかし、ヘブル語聖書では本書を「諸書」の一部と見なしています。それは、本書が預言書である以上に、隠された神の奥義が民に明らかにされる黙示文学(ヨハネの黙示録が新約聖書の例)だからです。将来の出来事の細かい予告と共に、「世界の歴史は主のご計画の内にある」という中心メッセージを通して、迫害と困難の中にいる民への

慰めと励ましが本書の目的です。

バビロンに捕囚の身となり、バビロンとペルシヤという二つの帝国の王宮に仕えたダニエルの視点から本書は書かれています。そして、ユダ崩壊から始まり、バビロンの終焉とペルシヤの興亡、ギリシヤの世界征服とその後の混乱、さらには主なる神が実現される世界の歴史の完成までを視野において、隠されていた神の奥義が選民に伝えられています。なお、象徴的な表現が多く使われているために、本書の解釈には諸説があります。

2 概略

(1) 1～6章

バビロン(1～5章)とペルシヤ(6章)の王宮におけるダニエルと三人の青年たちの活躍が描かれています。彼らは異国においても主の律法を守り続け、受けた迫害をも乗り越えていきました。彼らは異国の王宮の食事を食べず(1章)、金の像を拝まず(3章)、王にはなく主に祈り願いました(6章)。その結果、様々な迫害にあいましたが、主は彼らを奇跡的に守られています。更に、ダニエルにはバビロンの王たちに主が見せた夢を解く知恵が与えられました。ネブカデネザルに与えられた帝国と世界の将来に関する夢(2章)、高慢な王へのさばきの夢(4章)、主の神殿の器を汚した王に告げられた神のさばきと帝国の終わりの知らせ(5章)をダニエルは解釈し、解釈したとおりにものごとが現実となっていました。イスラエルの神である主こそが歴史の支配者であることが異教の地でも明らかにされています。

(2) 7～12章

ダニエルに対して主が示された幻と共に、神の

使いによるこれらの幻の解釈が記されています。バビロンの王ベルシャザルの時代には、四つの獣に関する幻(7章)と角を持つ雄羊と雄やぎに関する幻(8章)が告げられ、ペルシヤとギリシヤの時代が予告されています。ペルシヤの王たちの時代には、主がエレミヤに告げられた「七十年後のエルサレムの回復」に関する預言の解釈(9章)、ペルシヤの王に始まってギリシヤの王の神の前における高慢、さらには主による歴史の完成が幻で示され、神の使いによってその幻が解釈されます(10～12章)。

V 十二小預言書

ホセア書からマラキ書に至る、比較的短い十二の預言書は「小預言書」としてひとまとめにされています。これらの書はイスラエルの歴史の広い範囲を取り扱っており、旧約聖書全体を理解する上で欠かすことができません。

1 ホセア書

八世紀半ばにイスラエル王国で活躍した預言者ホセアは王国の繁栄を目の当たりにしました。しかし、この繁栄は主に喜ばれるものではなく、王国はアッスリヤによって滅ぼされます。

冒頭で、主はホセアに淫行の妻ゴメルを受け入れるよう命じました。結婚という契約によって結ばれた夫を捨てた彼女を通して、「イスラエルは主と結んだ契約を裏切ったこと」を示すためです。契約を裏切り、主を捨て、バアルを慕い求めたイスラエルには、厳肅なさばきが待ちかまえています。ですから、審判の深刻さを覚えて、今、主に帰りなさい、とホセアは訴えています(1～3章)。

続く4～11章では、イスラエルの問題がより具体的に示されていきます。彼らは主を知らず、主との契約の具体的指標である主の十戒を守っていません。それゆえに、彼らにはさばきが用意されています。指導者である祭司や預言者が民にこのことを教えてこなかったからです。イスラエルの淫行は、アッスリヤやエジプトとの同盟関係に表されています。この同盟関係はイスラエルがかつて金の子牛の偶像をつくった罪の繰り返しである、と預言者は指摘しています。イスラエルは、エジプトに帰り、アッスリヤびとを王としようとしています。それでも、愛と情熱の主は、イスラエルを捨てようとはしません。

イスラエルがアッスリヤと組んで、その経済的策略に乗っていることをホセアは指摘します(12・1)。この同盟の結果、国中に不正と格差が広がっていきました。ですから、ヤコブの生涯やエジプトについて語ることによって、主こそが自分たちの神であることをホセアはイスラエルに思い起こさせようとしています。さばきが予告されていますが、審判が主の最終的な目的ではありません。ですから、偶像を捨て、主に帰れ、とホセアは繰り返し民を招くのです(14章)。

2 ヨエル書

本書の時代背景ははっきりしていません。エルサレムに神殿があり、そこで祈りがささげられていた時代であることはわかります。

いなごによる飢饉に瀕している民に対して、主の家である神殿で祈りをささげるように預言者は命じています(1章)。主の日が到来し、滅びが全地に満ちるからです。しかし、いなごによる飢饉

は、強力な国民によるユダの荒廃を象徴しているに過ぎません。なぜならば、続く預言（2・14）を読む時、主の日が大军の到来を意味していることがわかるからです。審判の日に際して「心を裂け」と、悔い改めが勧められています。祭司たちの悔い改めの祈りを受けて、主は民をあわれみ、敵を打ち破り、雨を降らせ、豊かな実りを与え、主の霊を民に注がれます（2・15～3・21）。そして、主は諸国民をヨシヤパテの谷でさばき、彼らの流した血への報復をなされます。

3 アモス書

アモスは、ホセアと同時代、八世紀半ばの預言者であり、かつては南王国のテコアで羊飼いをしていました。著しい経済的發展を遂げていた隣国イスラエルに向かって、主が預言者を通して語られた警告が本書に記されています。

本書は四つの部分に分けられます。まず、諸外国へのさばきの預言（1・3～2・16）。イスラエルと主を侮った諸国への審判の言葉に続いて、主の律法を捨てたユダへのさばきが宣言されます。しかし、アモスの真の狙いはイスラエルの罪の指摘です。一部の富める者たちが弱者を虐げ、淫行を行い、主の預言を止めようとしていたからです。次に、アモスはイスラエルの罪を告発します（3～4章）。イスラエルは主を完全に捨てたわけではありません。しかし、神に特別に選ばれた国であるにもかかわらず、暴虐と圧制を放置してきました。それゆえ、主は干ばつ、飢饉、疫病、炎を送られます。しかし、彼らは主に帰ろうとはしません。そこで、神に会う、つまり厳粛な審判に備える必要がある、と主は宣言されました。

そこで、アモスはイスラエルに悔い改めを勧めます（5～6章）。公道と正義を国にあふれ流させよ、と主は命じました。様々な祭壇（ベテル、ギルガルなど）に行くことを禁じ、むしろ主に祈り願うことを民に要求しました。このままでは、やがて到来する主の日に暗やみが民の上に臨むからです。アモスの見た幻と本書のまとめが7～9章に記されています。主の測りなわを前にした時、もうイスラエルの罪を見逃すことはできません。彼らの聖所ベテルは必ず荒れすたれます。このことをアモスはベテルで預言し、警告を与えました。しかし、彼の言葉が繰り返し拒絶されたので、イスラエルの捕囚を主は宣告します。食物の欠乏と主の言葉の飢饉がイスラエルを襲います。しかし、終わりの日にはダビデ家の王によってイスラエルに祝福を回復する、と主は約束されるのです。

4 オバデヤ書

オバデヤがどの時代の預言者であったかは明確ではありません。本書のテーマは死海東岸のエドムへの主のさばきです。「エサウの子孫であるエドムが、自らの兄弟ヤコブの子孫ユダに対して暴虐を行い、その災いを喜んだゆえ、審判が彼らに臨む」と主は宣言されます。なぜならば、エドムの審判こそがイスラエルの復興であり、このことを通してシオンで王座につかれている主が、すべての王国とその民を支配されるからです。

5 ヨナ書

本書は他の預言書と異なり、ヨナの上に降りかかってきた出来事が記されています。ヨナは八世紀半ばの預言者であり、イスラエルの王ヤラベアムによる領土拡大を預言していました（列王下14・

25）。その彼が、侵略の手をイスラエルに伸ばしてきたアッスリヤの都二ネベに行つて預言するように命じられました。しかし、逆の方向にある地中海沿岸の町タルシシへ船で彼は逃れようとしています。しかし、主は大嵐を備え、ヨナは船から海に投げ入れられます。主が備えられた大きな魚にの呑み込まれたヨナは、三日三晩、その腹の中にいました。その後、魚は主の命に応えて彼を陸に吐き出しました（1～2章）。

再度二ネベに行くように主に命じられたヨナはその言葉に従いました。四十日を経たら町は滅びるといふ警告を聞いた二ネベの民は自らの悪しき道を悔い、そこから離れました。主は災いを思いかえしましたが、実現しなかった預言を語ったことにより偽預言者の汚名を負い、契約の民であるイスラエルにのみ表されるはずの主のあわれみ（4・2）が異邦人である二ネベに対して示されたのを見たヨナは、納得がいきません。しかし、主はとうごまを通して諸国民に対する自らのいつくしみをヨナに示されます（3～4章）。

6 ミカ書

ミカは「ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤ」が王であった時代、つまりイザヤと同じ時代の預言者です。しかし、宮廷に仕えたイザヤとは異なり、アッスリヤの来襲によって被害を受けたであろうモレセテ・ガテの出身者です。

預言者はまず北王国の都サマリヤがその罪のゆえに崩壊したことを述べ、それがやがて来るべきエルサレムへの審判の予表となると宣言しています（1章）。続いて、指導者たちが民のことを顧みず、むしろ虐待し、略奪していることをイスラエ

ルの罪のひとつとして指摘しています（2章）。

続いてミカは、主の民の回復のプロセスを記しています（3～5章）。エルサレムはその不義のゆえに罰せられ、荒地地となること。諸国民が主の言葉を求めて、シオンの山に集うこと。ベツレヘムで生まれる、ダビデ一族出身の王によって回復が現実となること。6章では、出エジプトから征服にわたる主のみわざを思い出し、公正と正義を行うように勧められています。そして、混乱している現実の中にあっても民をあわれみ、回復のみわざをなしてくださる救いの神への切なる祈りをもって本書は閉じられています（7章）。

7 ナホム書

本書にはアッスリヤの都ニネベの陥落の幻が記されています。612年に起こった出来事を予見している本書は、同じ町に対する主のあわれみを示すヨナ書と対照です。

主の力を侮っている者たちに主の報復のみわざを思い出させたのち、ナホムは、敵はもはや襲ってこないユダに向かって語っています。2・2以降、ニネベが軍勢に滅ぼされていく姿が記述されていますが、「見よ、わたしはあなたに臨む」の表現からわかるように、厳粛な審判は、彼らが侮っていた主によるものであることが強調されています。

8 ハバクク書

バビロンの侵攻についてのハバククと主との対話が記されています。悪人によって義人が虐待されている現実を訴えたハバククに対して、主はカルデア人（バビロン）を起こすと宣言されます。しかし、邪悪なバビロンを主が用いられることに疑問を呈した預言者に対して、正しくない行いを

しているバビロンも最終的には主に滅ぼされる一方で、「義人はその信仰によって生きる」と語られます（1～2章）。3章にはハバククの祈りが記されています。速やかに変化しない状況の中で、ふさわしい時に必ず行動を起こされる主への信頼によって預言者は力をいただきます。

9 ゼパニヤ書

ゼパニヤは、ヨシヤがユダの王であった時代の預言者です。彼はハバククと時代をほぼ同じとします。主の日の到来によって、ユダにいるバアル崇拜者に対して厳粛なさばきが下されます（1章）。そこで、主の激しい怒りから逃れるために主と正義と謙遜（けんそん）を求めよ、と命じられたのち、ユダを虐待する諸国がやがては荒野となることが預言者によって述べられています（2章）。預言者の矛先はエルサレムに向けられ、高ぶった指導者たちへの警告が語られます。しかし、主はイスラエルに懲らしめを与えることによって、彼らを謙遜な民と造り変え、その間に住み、幸福と誉れとを回復されると約束されます（3章）。

10 ハガイ書

バビロン捕囚から帰還した後、ペルシャ王ダリヨスの治世（520年）に語られた預言が記されています。まず、主の家（神殿）を再建することに着手するならば、雨と収穫の祝福は主から与えられるという預言（1章）。勇気を出し、再建に取り組めば、万国の民がその栄光を見て、貢ぎを携える約束（2・1～9）。最後に、神殿の再建によって国がよめられ、総督ゼルバベルの地位を堅くされることが預言されています（2・10～23）。

11 ゼカリヤ書

ハガイ同様、ゼカリヤも神殿再建に取り組んでいる民へ主の言葉を伝えました。

まず、1～8章には主が示された幻が記されています。主は預言者によって語られた言葉を実現してきたことが示された後、ゼカリヤは8つの幻を綴っています。それらは、神の馬、四つの角、測りなわを持つ人、大祭司ヨシヤの任命、燭台と二本のオリブの木、飛んでいる巻き物、エパ耕の中の女、四台の戦車です（1・7～6・15）。これらを通して、神殿の再建、主の臨在の実現、聖なる指導者たちの擁立、そして律法による正義の確立が約束されています。幻ののち、預言者の言葉に従うことの必要性が語られ、やがて来るべき国家の回復と諸国民の来訪が預言されます（7～8章）。

続いて、二つの託宣が集められています。最初の託宣では、愚かな牧者たち（王）へのさばきと、主自らが牧者となつてその民を養うことが記されています（9～11章）。二つ目の託宣では、主がダビデ家から王を興し、エルサレムに光栄を与えられる一方で、諸国民がエルサレムを攻撃する様子が描かれています。しかし、主自らが勝利をえられた結果、万民はエルサレムで仮庵（かりいお）の祭を守ります（12～14章）。

12 マラキ書

神殿とその祭儀を軽率に扱わないようにとの忠告が、本書を通して民と祭司に与えられています。5つの論争、つまり神の愛、適切に行われていない神殿祭儀、レビをきよめ、悪しき者をさばく主の日、十一のささげものの重要性、正義が実現する主の日が取り扱われています。そして、律法の遵守と主の日の到来を備える預言者エリヤの来訪を予告し、旧約聖書はその幕を閉じます。

聖書 創世記1・1～25 テーマ はじめに神は

序論

(鎌野)

7月から、年題「信仰に生きる」の第2期「働く信仰」が始まる。今月は創世記の最初の数章を学ぶが、子どもたちが学校で教えられていることと違う点があるので、折り深く準備したい。「この世界が神の言葉で造られた」ことは、「信仰によって：悟る」のである（ヘブル11・3）。今週学ぶ天地創造の記事も、科学の教科書としてではなく、全知全能の神を信じる信仰的な見地から書かれたことを明確にしておこう。見えるものを研究対象とする科学では扱えない、見えない神がなされたみわざが、この聖書個所に記されているのだ。

一、神は全てのものを創造された

〈はじめに〉とは、物質世界がまだ存在しない時のことである。科学は、このような時のことを扱うことはできない。だが聖書は、「神は天と地とを創造した」と明言する。世界を創造なさった見えない神と、創造された見える世界は、根本的に違う。創造主こそ絶対であり、被造物はこのお方の前に謙遜にならねばならない。

2節を、最初の天地創造の後にいったん減ぼされた世界の状態と見るか、天地創造前の状態と見るかで解釈の違いがある。しかし、どちらにせよ重要なのは、〈形なく、むなしく、やみが〉あった淵を〈神の霊が：おおっていた〉ことである。そのとき、神が〈光あれ〉と言われると〈光があつ

た〉。神の霊と神のみ言葉の働きによって、むなしに所に最初に光（エネルギーと考えると良い）が生まれたのだ。科学者の唱える、宇宙が誕生するとき「ビッグバン」と言われるエネルギーの大爆発があつたとの説に似通った面がある。

その後には神の創造のわざが次々と進む。全てが神の言葉によってできたのである。人間の耳に聞こえる言葉でないにしても、神の意志に従ってこの世界の全てが創造されたことを、私たちは信仰によって受け入れる者になりたい。

二、神は秩序正しく創造された

あるクリスチャンの物理学者は、天地創造の六日間のプロセスを次のように説明する。第一日↓ビッグバン。第二日↓水素とヘリウムがガス状の雲を造り、次第に分離していく。第三日↓太陽系の創造と二酸化炭素のガスに包まれた地球の創造、植物の創造。第四日↓植物の光合成による酸素の生成。二酸化炭素ガスが薄くなって天体が見えるようになる。第五日↓魚類・両生類・鳥類の創造。第六日↓爬虫類、哺乳類の創造。これが絶対的に正しいとは言えないにしろ、神の秩序正しい創造のみわざを、科学的に矛盾なく説明している。

植物や動物が〈種類に従って〉創造されたと4度も記されていることにも注目したい。これは、学校で教えられている進化論と違っている。進化論は、一つの種から様々な種が進化したと言うが、これは立証された科学的事実ではなく、あくまでも一つの仮説である。進化論の最大の問題点は、突然変異によって種が変化するという主張である

う。類人猿が人間に進化する過程でさえ、いまだに謎に包まれているのに、アメーバのような単純な生物が、偶然におこる突然変異によって、人間のような複雑なものにまで進化できるのであろうか。かえって、神がその深い知恵によって秩序正しく、すべての種を創造されたとするほうが、はるかに理解しやすいのではないか。

三、神は良きものを創造された

〈神は見て、良しとされた〉という表現も6度繰り返されている。神が創造されたものの中には不必要なものは一つもない。すべてが良きものである。この後、人間の創造が続くが、それ以前に創造された自然界の全ても良きものであることを忘れてはならない。現在、叫ばれている「地球を大切に」という訴えは、聖書がその冒頭から宣言していることである。

人間は、神の前に謙遜にならねばならないが、神の創造された自然界に対しても、傲慢になつてはならない。資源を浪費せず、自然を汚さず、大切にするときこそ、人間も繁栄することができる。

結論

現代の多くの人々は、見える世界のみに関心をもっている。見えない世界や見えない神を思うことができないでいる。私たちはそうであってはならない。見えない神が全世界を創造され、今もこの世界を支え守っておられるという信仰によって生きていこう。この信仰を持たなければ、聖書を正しく理解することはできない。

研究資料

(足立)

テキスト

1 創造者と創造について明快かつ簡潔な言及がなされている。創世記1章1節は聖書に登場するすべての事柄の土台である。この記述の目的には以下のことが考えられる。(1)創造者の存在を提示すること。(2)全世界の起源を説明すること。

(3)過去における神のみわざと将来におけるそれを結ぶこと。創造者は神(エロヒーム)と宣言されている。創造の神は主(2・4)であり、アブラハムを召した神であり(12・1)、エジプトからイスラエルを救出された神である(出エジプト3・15)。創造された(バーラー)は、常に神のみわざを表す言葉である。

この1章1節により著者は、創造主なる神が宇宙に存在する、すべてのものを創造されたと主張している。すなわち全世界の起源である。そして創造主なる神だけが永遠にすべてのものを統べ治めるお方。この1章1節の主張は、後の聖書著者の記述にも反映されている(例、詩篇33・6、ヨハネ1・3、ヘブル11・3等)。

そしてはじめに という言葉の意味は、時間という期間の出発点として、神の創造を位置づけている。ここに歴史の始まりがある。このことは当然の帰結として、終わりの時へと焦点を広げる(参照イザヤ65・17、黙示録21・1)。

2・5 1節において被造物が存在する大前提が述べられており、2・31節では、地 すなわち地球に焦点が絞られ、創造のみわざが記述されている。

2節は、神が人のために用意される前の地の状況を述べていると考えられる(津村俊夫氏)。それは混沌(無秩序)ではない。むしろ地は最初人が想像するような形を成しておらず、地について人間が考えるような何物も地には存在していなかったと、著者が主張しているように考えられる。植物もなければ、動物もいなく、人間も存在しなかった状態(参照新改訳第三版、「地は茫漠として何もなかった」。詳しくは、『聖書翻訳を考える』新改訳聖書刊行会「編(いのちのことば社)のp40、46を参照。

3節には光の創造が記されている。これは神のみ言葉による創造であるが、記述されている最初のものである(参照1・6、9、14、20、24、26)。これは神のみ言葉の權威を示すと同時に、神だけによる完結した完全なみわざであることを宣言している。神はその光を見て、良しとされた とは、それ自体が美しいことを主張している(1・10、12、18、21、25、31)。神は見るべきものを見られるお方である(16・13)。そして墮落後には神は良きものを見ることなく、人間の悪いことを見られることになる(6・5)。

創世記1章において神のみわざは、しばしば区別のそれである(1・4、6、7、14、18)。

4節では光とやみの区別が記述されているが、この光は地を照らす光であって、太陽の創造による光(第四日目)に先立つものである。聖書は太陽の光創造以前に、神がその光を創造されたことを宣言している。そして光の創造により、夜と昼との区別が生じた。

6・8 第二日の創造の場面である。おおぞら

を意味するヘブル語(ラーキア)は動詞(ラーカ)に由来し、広がりを示す(参照、詩篇136・6、イザヤ42・5、44・24、ヨブ37・18)。このおおぞらがどのように形成されたかについては推測できない。しかし事実、神の創造のみわざとして大空が創られ、上の水と下の水が区別されたのである。8節に神はおおぞらを天と名づけられた とあるが、1節の天とは意味が違う。1節の天と地は、対照的な2語を用いて万物を指している。

9・13 三日目の創造の記述である。ここでは乾いた陸地と、海とが形成され、陸地に植物や実を結ぶ木が生じたことが伝えられている。三日目の創造のみわざによつて、第二日のみわざが完了したことになる。神は乾いた地に人間が生きていく環境を整えようとされたのであろう。ここで大切なのは、地は青草と、種類にしたがつて種をもつ草と、種類にしたがつて種のある実を結ぶ木とをはえさせたと言うこと。これは本質的に同種の実を結ぶ関係を示している。種類の違いは、それぞれ異質のものがそれぞれ役割と特徴を与えられて共存することにある。そしてこれらの創造は、人間が恩恵を受けるためにある。陸地が用意されたことは、創世記の中心的関心事である(参照、12・7、13・15、15・18、26・4)。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Hamilton, V. P., The Book of Genesis Chs. 1-17 (Eerdmans), Sailhamer, J. H., "Genesis," The Expositor's Bible Commentary, Vol. 2 (Zondervan)

1日 礼拝メッセージ例

聖書	創世記1・1～25
タイトル	はじめに神
暗唱聖句	はじめに神は天と地とを創造された。
目 標	天地創造の由来を知り、信じる。

導入

(松浦み)

皆さんは夕日が沈むのを見たことがありますね。真っ赤な太陽が、空もあたり一面も真っ赤に染めて西の空にゆっくり姿を消して行きます。また、朝日が昇るのを見たことがありますか。真っ暗な空がだんだん明るくなって、真っ赤で光り輝く太陽がオハヨウ！と顔を出します。太陽だけでなく夜空に輝く月や星をながめてごらん。きっと、心がワクワクして、わあーすごい、きれいだなあと思うことでしょう。

この太陽や月や星、自然界の動物や植物など、いったい誰が創ったのでしょうか。

天地の創造者はどなた？

聖書は「はじめに神が天と地とを創造された」とはっきり、神様が天地万物をお創りになったと示しています。では、天地が創られる前の様子はどんなだったのでしょうか。地は形なく、何もなく、あたり一面は真っ暗闇で、神の霊が水のおもてを覆っていたと聖書に書かれています。ただ、神様だけがおられたのです。ある時、神様はご自分のお考えをもって、宇宙全体の完成予想図を計画され、目的をもって天と地とを創造なさったのです。

ではどんなふうに天地は創られたのでしょうか。

神様の言葉のすばらしさと力

神様は天地を創造なさるとき「言葉」をもって創造されました。えっ！と驚いてしまいますね。真っ暗闇の中、神様はまず「光あれ」と言われました。するとどうでしょう。神様の言葉のとおり、突然光が輝きました。神様はその光を見て良しと満足されました。そして、光と闇を分け、光りを昼と名づけ、闇を夜と名づけられました。これが創造の第一日でした。第二日は、水の間に大空を創って水を分けました。大空を天と名づけられました。第三は「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」と言われると、乾いた地が現れ、陸と名づけられました。水の集まった所は海と名づけられました。陸には、青草が生え、あらゆる種類の木が茂るよう命じられました。すると、つばみはほこるび、花が咲き、種は芽を出し、木にはたくさんの実がなりました。神様はこれを見て良しとされました。第四日に神様は、天の光が昼と夜とを分け、季節や日や年をはつきりさせるように、と言われました。神様は二つの光を創り、大きいほうの光、太陽に昼の間光るようにされ、小さいほうの光、月に夜輝くようにされ、また星を創られました。第五日は、海と空の全ての生き物をお創りになりました。大空には鳥たちが飛び回り、水の中ではあらゆる種類の魚が泳ぎ回りました。第六日は、陸に住む家畜やはうもの、野の獣たちが種類にしたがって創られました。神様はこれらを見て良しと満足されました。このよ

うに天地万物は、神様のお言葉とご計画によって創られたのです。

神様がくださった地球を大切に

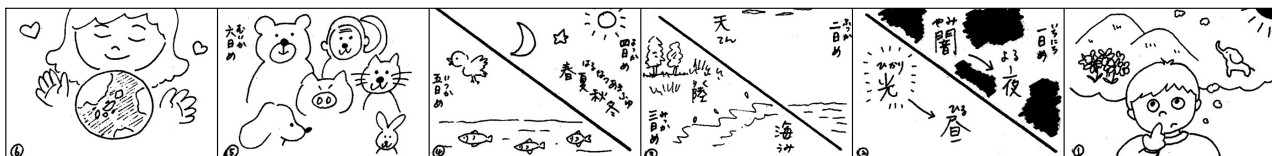
神様は大空も海も山も、そして小さな野原の花や虫たちも一つ一つ心を込めて創造なさいました。そしてそれらの創造の後、「見て、良しとされた」と繰り返されています。神様は花まるマークをつけてくださったのです。ですから私たちは神様がくださった地球を大切にしなければなりません。「3Rで地球を救おう」というキャンペーンが愛地球博以後、子どもたちの間でも実践されています。リデュース（自然環境の保全）、リユース（再利用）、リサイクル（再利用）の3Rです。讃美歌21四二六には、こんな歌詞があります。

一、私たちを生かす水と土と空気は神様の贈り物。感謝します、心から。三、完全な世界を神様は創られた。しかし、人は知らずにその調和を破壊した。五、地球という星は未来の子どもの家。いつまでも共に住む道を示してください。

今、地球は温暖化で大変な状態になっています。北極、南極の水が溶けて水かさが増し、沈没しそうなっている島もあります。さまざまな災害が世界の各地で起こっています。「豊かな生活を支え続けた資源を奪い、無駄にしてきた罪を赦してください」と祈ろうではありませんか。昔も今も神様はこの世界をご支配なさっておられます。創り主を信じ、ほめたたえて歩んで行きましょう。

♪かみさまがつくられた♪

(改訂版こどもさんびか112)



聖書 創世記1・26～2・7 テーマ 人の創造

序論

(鎌野)

聖書は、天地創造の記事の中で最も詳細に、二つの章にわたって人間の創造を述べている。人間は「創造の冠」として特別な存在だからである。では、どのような点において他の被造物と違うのだろうか。それを学んでみよう。

一、神のかたちに造られた者

神は、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」ろうと言われた。神は見えないお方であるから、かたちといっても外面ではなく、人格性(知性・感情・意志をもった存在)、道徳性(清く歩みたいと願う存在)、霊性(霊なる神と交わる存在)、社会性(他の人間と交わる存在)といった内面のものを意味することは明らかだろう。唯一の神であるのに「われわれ」と言われているのも意義深い。これは、三位一体の神を暗示しているのだろう。だから神は、人を「神のかたちに創造し、男と女とに創造された」。三位一体の神が愛し合われたように、人間を愛し合う存在として創造されたのである(2・18、24)。

人間は最初、このような高貴な存在として創造された。いわゆる「性善説」である。だが来週学ぶように、罪が人の中に入り込んだ。それ以降は、「性悪説」にならざるを得ない。それでも神は、人間が神のかたちをとりもどすことができるように働いてくださった。神のかたちそのものである

御子イエスの受肉は、まさにその極致であった。この方によって、人は「造り主のかたちに従って新しくされ」るのである(コロサイ3・10)。

二、地を治める者

神は人に、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」と言われた。だが、従わせよとか治めよとは、人間の勝手気ままにして良いという意味ではない。神のかたちに造られた人間は、被造物をその良い状態に保つ責任を委ねられたのである。それゆえ、「すべての草」と「実を結ぶすべての木」が人間の食物として与えられており、肉食は許されていない。動物の食糧さえも「すべての青草」に限定されている。

「おおかみは小羊と共にやどり、…乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ…」という姿こそ、神の望まれた世界であろう(イザヤ11・6～9)。しかし、現実には、自然界も人間界も争いが満ちている。特に人間は自らの繁栄のために、自然界の多くのものを犠牲にしている。例をあげると、食糧の増産のために農薬を用い過ぎたことにより、絶滅する動物が出てきている(トキの場合など)。自動車や電気製品は人間の生活を便利にしたが、それによって二酸化炭素がどんどん増加している。その結果、地球温暖化が進み、異常気象や酸性雨をもたらしている。また森林の乱伐による砂漠化も自然破壊の例だろう。人間は、自分が繁栄することを求めるだけであってはならない。神が創造されたこの自然界を治めるべき重大な責任があるのだ。

三、神の息で生きる者

2章にも人の創造の記事がある。7節の「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」という表現に注目したい。これは決して、神がどう人形を作り、風船をふくらませるように息を入れたという意味ではない。人間の肉体は、土の成分と同じものによって構成されている。ヘブル語では「土」はアダーマー、「人」はアードームと発音することを知っておこう(最初の人が「アダム」と名付けられたのはそのゆえ)。そして、人は死んだら土に帰る(3・19)。そのような人が、神の息を吹き入れられたことによって生きた者となったのである。15節以降を見ると、人は神と自由に語り合っている。神の息によって生かされたからにはかならない。もし神の息がなければ、人はただの土のかたまりでしかない。

多くの人々はこの真理を知らないでいる。神の息がなくても、神と交わりがなくても、生きていけると考えることは、全くまとはずれた。それは来週学ぶ、「人の罪」の結果である。神によって生かされていることを認めるとき、私たちは初めて、創造された時の本来の人になれる。

結論

神は人を、他のどの被造物とも違う存在として造られた。神と交わりをもつときにこそ、神のかたちを保ち、他の被造物を治めることができる。聖書の示すこの基本的な真理を、どんな時にも忘れてはならない。

研究資料

(足立)

創世記1・24～31は、第六日目の創造である。地の動物と人間の創造が記され、人の創造が神の創造のクライマックスとなっている。

テキスト

26 われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り 人間の創造においてのみ、あらかじめ聖なる意図の声明が語られている。創世記の著者は、他の被造物とは区別して神に近い存在として人の立場を伝えている。

われわれに（参照3・22、11・7、イザヤ6・8）とあるが、これに関しては様々な言及が成されてきた。伝統的にキリスト教会は神性の複数と理解してきた。勿論これには本文の支持と三位一体のキリスト教神学を満たすものがある（ヨハネ1・3、エペソ3・9、コロサイ1・16、ヘブル1・2）。しかしこれは神が複数存在すると言っているのではない。唯一の神の複数表現は、創世記1・2にある「神の霊」への言及によって支持されるし、形という言葉それ自体が複数形という事実に基づく。聖書全体の記述から判断するなら、神は唯一の存在者であられ、新約の啓示を考慮すると御父と御子と御霊なる神の交わりに生きておられるお方である。

かたち（ツエレム）という言葉は、「神の」という修飾がつくとき、人が神の代理として他の被造物を「治める者」であることを意味している。古代オリエントでは諸国の王が神のかたちであると考えられていた。しかし聖書では他のオリエント

諸国とは違って、人は王だけでなく男も女もみな神のかたちと言われている。したがって創世記1章で人が神のかたちと言われているのは、神の代理人として被造物全体を治めるように創造されたのだと主張されている。詳しくは、『聖書翻訳を考える』新改訳聖書刊行会「編」（いのちのこば社）のp46～48を参照。

神の前には、神の創造のみわざにおける焦点であり白眉（最も優れたもの）である。また神の栄光と誉れを現す存在であり、被造物の中で神に最も近く置かれた者であった（詩篇8・3～8）。けれども墮罪（創世記3章）以後、神のかたちは歪められ、破損し、人は神の特別な干渉無しには神の栄光を現せなくなっている。

そこで私たちキリスト者は神のかたちを聖書全体からとらえ、主の恵みによって回復される必要がある。私たちは神のかたちとして造られたが、ただ似せられただけである（創世記1・26）。私たちは神ではない。墮落後神のかたちは消し去られてはいるものの、親から子に伝えられている面はある（創世記5・1～3、9・6、ヤコブ3・9）。しかしながら最初のアダム以後の私たちは、部分的に文化面で成就しているにすぎない。第二のアダム（参照、詩篇8篇、ヘブル2章）であるキリストだけが、神のかたちである統治機能を完全に成就させることが出来る（マタイ28・18～20、ルカ24・50～51）。神のかたちを唯一無比に表現されるお方は、天におられる御子である。この方こそ真の神のかたち（ローマ8・29、Iコリント15・49、IIコリント3・18、4・4、コロサイ1・15）

20）であられ、地に本当の王としてこられる。彼は墮落した人間に救いをもたらす。彼は人間の二つの機能を完全に成就される。彼は教会をご自身の花嫁とし（エペソ5・23～32）、霊の子たちを地に満たす（イザヤ53・10～11、マタイ12・46～50、ヨハネ1・11～13、ガラテヤ3・29）。キリストはご自分の弟子たちを祝福し、彼らをいのちの御霊に満たす（ヨハネ20・22）。キリストはすべてのことをご自身の支配下に置かれる（ルカ10・18～19、エペソ1・22、コロサイ1・18～20）。こうして神のかたちが回復される。そしてキリスト再臨時には、人の朽ちる体も、キリスト信仰者の場合は、本来あるべき神のかたちにふさわしくされ、朽ちないキリストの栄光の体と同じものに変えられる（ピリピ3・21）。

2・4 この節は天地創造（1・1～2・4）の結語であり、人の創造（2・4～25）の序言になっている。つまり1～2章に二つの異なった創造の記述があるのではなく、2・4～25では第六日目（1・26～30）に焦点を合わせて、詳述している。

7 土のちりて人を造り 芸術家として神は土地のちりて人を形造られた（参照3・19）。**命の息** 動物も息をするが、人間は神の息吹きによって支えられる存在であると著者は強調している。人はいのちの息が直接吹き込まれたことによって、他の生き物とは違う存在である。すなわち神に似るように神のかたちとして創造された。

参考図書 松本任弘『創世記』『実用聖書注解』（いのちのこば社）、Walke, B. K., Genesis (Zondervan)。

聖書 創世記1・26〜2・7

タイトル 人の創造

暗唱聖句

主なる神は土のちりで人を造り、
命の息をその鼻に吹きいれられ
た。そこで人は生きた者となっ
た。 創世記2・7

目 標 人の創造の特異性を深く知る。

導入

(松浦み)

愛ちゃんのお家に3人目の赤ちゃんが生まれました。かわいい男の赤ちゃんです。愛ちゃんは「ママ、私もこんなに小さい赤ちゃんだったの？」と尋ねました。すると、お母さんが「そうよ、愛ちゃんもママのお腹から生れた時は小さい赤ちゃんだったわよ。ママのおっぱいをいっぱい飲んで大きくなったの」と答えました。みんなも先生もお母さんのお腹から生まれました。そのお母さんもそのまたお母さんから生まれました。このようにずっと考えていくと、一番初めのお母さんはだれから生れたのでしょうか。答えは聖書にあります。

神様のかたちに造られた

一番初めの母はエバで、神様が造られたのです(創3・20)。先週は、神様がどんなふうに関天地を創造されたか、そしてすべてを見て、良しと満足されたかを学びました。最後に神様は「これらのものを治めるために、わたしにかたどって人をつくろう」とおっしゃいました。神様は自分のかたちに人を創造し、男と女とに創造されました。「神のかたち」とは、手があって足があって、目があって、

すがたかたち

鼻があるというような姿形のことではありません。英語の聖書には *image* (イメージ) と訳されていますが、神様は私たちを、神に似たイメージ、神に似た性質を持つ者として造られました。ですから、私たちは神様に祈ったり、賛美して心を通わせることができるのです。パスカルというフランスの学者がこう言っています。「人の心には神の形をした穴がぼつかりと開いています」。この心奥深くに開いた穴は、神様だけが埋めることができます。神様を信じ、心の王座にイエス様をお迎えするとき、初めて本当の平安を得ることができるのです。なぜなら、人は神のかたちにかたどって造られ、神と交わるように造られているからなのです。

土のちりで造られた

神様は他の生き物をつくる時、言葉だけで創造されました。しかし、人は特別なものとして造られたのです。「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた」と聖書は記しています。このことは、どういうことを示しているのでしょうか。それは人が、霊的な存在として造られたということを示しています。命の息を吹き入れられたとき、人は生きた者となりました。ここが、人間と他の動物が区別される重要なところで、すね。神様は私たちに、自分の意志で考える力や、感じたり、話したり、愛したり、神様と交わる力を与えてくださいました。皆さんは学校で人間はサルから進化したというようなことを聞く事でしょう。しかし、聖書を知ると、神様が私たち人間を造ってくださったことがわかり、うれしくなりますね。イザヤ43・4には「わたしの目には、あ

なたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(新改訳)と。神様は私たち人間をどんなものより尊いものとして愛してくださっていることが良くわかります。

造られた人間のなすべきこと

神様は造られた人を祝福され、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」と言われました。それだけでなく人や動物の食物として青草や木の実を与える約束をされました。神様が「地を従わせよ、生き物を治めよ」と言われたからと言って、人間の欲するままを勝手気ままにするならば、地球はバランスを崩してしまいます。近年中国から黄砂が飛んできて、一日中視界がさえぎられることが、多く起こっています。農作物にも大きな影響が出ているようです。森林の伐採が原因の一つのようです。地球にやさしい行動は何だろう、と皆さんも考えてみてください。資源ごみの回収に協力したり、国際飢餓対策機構などクリスチャンの団体の募金に協力したり、小さなことから実行してみよう。「マイはし袋」を知っていますか？外で食事をする時、割り箸を使わないで自分の箸を常に持ち歩く運動です。使い捨て箸のために東南アジアの木がたくさん切られているのを阻止しようというものです。21世紀は世界中の人々と手をつないで生きる時代ですね。神様に祈りながら、よい知恵をいただき、光の子として歩みましょう。

♪君は愛されるため生れた、君の生涯は愛で満ちている♪



聖書 創世記3・1～9 テーマ 人の罪

序論

(鎌野)

神が天地万物の創造を終えられたとき、「それは、はなはだ良かった」(1・31)。しかし、それ以後の世界は、現在も含め、憎しみと争いに満ちたものとなっている。それは人の罪の故である。最初の人アダムとその妻エバがしたことを今日の聖書箇所から探り、何が罪なのかを学ぼう。

一、神の言葉を誤解する

神の被造物の一つであるへびを通して、サタンはエバに語りかけた。何語で話したかはわからないが、その目的は明確だ。サタンは、エバが三つの点で神の言葉を誤解するように仕向けた。第一に、神が与えられている自由の大きさを疑わせた(1節)。その結果、エバは神の命令が厳しいものだと思ってしまった(3節)。第二に、神の言葉は偽りであると思わせた(4節)。第三に、神が自分たちに対し悪意を抱いていると思わせた(5節)。今でもサタンは同じような口で神の言葉を疑わせようとしている。聖書は人の自由を束縛する堅苦しい書物だとか、昔の神話集で事実起こったことではないとか、聖書の神は砂漠の神で農耕民族にはむかないとか、いろんな声が聞こえてくる。そういう人々が知識人であろうと、科学者であろうと、その背後にはサタンがいることを忘れてはならない。サタンの目的は、人と神との信頼関係を崩すことなのである。

特に、〈あなたがたは決して死ぬことはないでしょう〉との言葉に注意したい。確かに木の実を食べたアダムとエバは、肉体的には死んでいない。しかし、神から身を隠したことからわかるように、神との霊的な関係においては死んでしまったのである。ちょうど放蕩息子が父のもとを離れたことが死んでいたことであるように(ルカ15・24)。そして神から離れた人間は、いずれは肉体的にも霊的にも永遠の滅びに至るのだ。

二、神に代わって神になるつもりとする

エバは、〈神のように善悪を知る者となる〉というサタンの言葉にのせられて、その木に近づいた。その木の実は〈食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい〉と思われた。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」(1ヨハネ2・16)りが、神の言葉を疑わせたのである。エバはついにその木の実を食べ、夫のアダムにも分け与えた。

善悪を知る木の実を食べるとは、人間が善悪の判断を下して行動することを意味する。すべてが良かったこの地上に、人間が自分勝手な規準で善悪を定めようとしたのである。本来、善悪を定めることができるのは神だけだ。人間が、自分の判断で善悪を決めるとすると、自分に都合の良いことが善で、都合の悪いことは悪になってしまう。それは、自分を神の立場に置くことにほかならない。被造物に過ぎない人間が神のようになろうとすることが、罪の本質である。

先週学んだ「神のかたち」とは、神と同じ立場になることではない。神の定められた善悪の規準

に従うことである。自分を絶対化するのではなく、神の言葉を謙遜に聞き、その言葉に従って行動することである。

三、神から隠れようとする

木の実を食べた二人は、へびの言ったとおりに目が開けた。ところが皮肉なことに、彼らがわかったのは、〈自分たちが裸であること〉だった。木の実を食べる前には、「ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」(2・25)にもかかわらず、彼らは自分たちのしたことが神の前に恥ずべきことだと知った。そしてその恥を隠すために〈園の木の間に身を隠した〉のである。

たとい罪を犯しても、それが悪かったことに気付いたら、正直に神の前に出て悔い改めれば良いのだ。だが、罪は人を神から離れさせようとする。そんな二人に、神は〈あなたはどこにいるのか〉と呼びかけられたことに注目しよう。神は彼らがどこに隠れていたかご存じだったろうが、あえて彼らからの返事を求められた。人が神を避けても、神は人を忘れられることはない。罪を犯した人間をも愛し、ご自分のもとに帰ってくるように呼びかけておられるのである。

結論

今も多くの人々が神の言葉を誤解し、自分を絶対化し、神の前に出ようとしないうる。しかし神は、すべての人々に「あなたはどこにいるのか」と呼びかけておられる。この神の愛の呼びかけに正直に応答するよう、人々を促そう。

研究資料

(足立)

創世記3章は悪の起源を論じてはいない。むしろ著者は、神のかたちとして創造された人間がなぜ神の祝福を受けることができなくなつたか、またその墮落した人間に対して神は何を成されたかを、歴史的事実として伝達している。これが主の啓示である。したがってこの個所が提示している歴史的事実は、キリストの十字架による贖いがすべての人に例外なく必要不可欠なものであることを伝えている(参照、ローマ5・18、19、Iコリント15・20、21)。

テキスト

1 ヘビ(ナハシユ) そのものは普通の存在である(例、民数記21・7、9、申命記8・15、箴言23・32)。著者はヘビがすべての被造物の中で最も狡猾であつたと記している。狡猾と訳される言葉(アルム)は、聖書において第一義的に否定的な用語ではなく、知恵と巧みさを提示している。この言葉は創世記において他の使用はなく、箴言(12・16、23、13・16、14・8、15、18、22・3、27・12)とヨブ記(5・12、15・5)に出てくる。ここではヘビの狡猾さそのものが問題なのではない。むしろヘビのそれを利用してはいるサタンの存在を背後に見ることが賢明であろう。ヘビが人間とコミュニケーションを持つているのは、墮落以前のことなので十分な説明は不可能である。けれどもサタンがヘビを活用しているのは確実。ヘビは誘惑に際し、女性に働きかけた。ヘビは神の言葉(2・16、17)を改ざんし、神が人を束縛

する存在であるかのような印象を与える。

257 この出来事は微妙な簡潔さによって記されている。ヘビは2度語つただけだが、その手法は被造物二人と創造主なる神の間にある信頼と服従のバランスを相殺するには十分であつた。この出来事の主な特徴は **神のように善悪を知る**。こ

とへの問いである。ヘビは自らの質問によつて、神が男と女から保有していたこの善悪の知識に関してほめかしている。創世記1、2章において、神はこの知識を男と女から保有しておられた。それに對してヘビが語りかけたことは、神の創造の秩序への直接的な挑戦であつた。神は人のために**良い**ものを提供してこられた(例、1・4、10、12、18、21、25、31、2・18)。善悪の問題は人間が対処すべきものではなく、神だけが関わる知識であつたと考えられる。人が神にのみ信頼し服従すれば、すべては祝福された。

一方女の**これに触れるな**と言う発言にも神の言葉への付け加えがある。そして**死んではいけないから**と女は神のことばを不正確に引用している。女は日々の思惑通りに、神の約束を自ら変えてしまつてゐる(参照2・16)。ヘビはこの女に**それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです**と畳み掛ける。その言葉は女に、見る立場、食べる欲、目に美しい欲、賢くなる誇りを与えてしまつた(参照Iヨハネ2・16)。そして神の代わりに神の立場に立たせ、ついにその実を食べ、夫にも食べさせた。男も神に対してではなく、自

分の妻に従う選択をした。それを拒む自由も与えられていたのに。皮肉にも彼らの目が開かれ、恥の意識が入つてきた。二人は今や善と悪の取り扱いに耐えうる神のような人格を持たないまま、その知識だけが入つてきた。結果彼らは自分たちのみならず、他の被造物全体をも罪による不合理に引き入れることになつた(ローマ5・12、8・19、22)。

8 審判の場面である。この状況は、神の到来による**声**(コール)で幕が開ける。主の御声という表現はモーセ五書では共通のもので、特に申命記で使われている(参照、申命記5・25、8・20、13・18、15・5、18・16、26・14、27・10、28・1、2、15、45、62、30・8、10)。以上の個所では、主の御声への服従が記述されている。

アダムとエバは園において契約違反後、最初の主の御声を避けた。そして彼らは木々の間に身を隠した。創世記1、2章で木々は、神の豊富な供給のしるしであつた。ところが3章の始めにおいて木々は、男と女を神に対する反逆へと導く場となり、その彼らが神から隠れようとする場所となつてしまつた。そして最後に二人が園から追放される時、彼らの歩みはいのちの木の道から締め出された(3・24)

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、Sailhamer, J. H.: "Genesis," The Expositor's Bible Commentary, Vol. 2 (Zondervan), Waltke, B. K., Genesis (Zondervan)。

聖書 創世記3・1～9

タイトル 人の罪

暗唱聖句 主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。

創世記3・9

目標 どのように人が罪に陥ったかを
知り、学ぶ。

導入

(松浦み)

先週は神様が世界を造り、神のかたちに似せて人間を造り、祝福してくださったことを学びました。今日は、造られた人間がどのようになったかを学びましょう。

神様の命じられたこと

まず初めに、土のちりで造られた人間はアダムと名づけられました。「土」という意味です。このアダムに、あるとき神様が一つの約束を命じられました。「あなたは園のどの木からでも、心のままに取って食べてよらしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう」(2・16)。なぜ、神様はアダムにこのようなことをお命じになったのでしょうか。それは、「人間は神様によって造られたものに過ぎないのだよ。だから、神様抜き自分一人で善い事と悪い事を考える事ができない者なのだ。いつも神様と共に歩む事を忘れてはいけないよ」ということを心に覚えて生きるように与えられた約束でした。そして、その約束を破った「必ず死ぬ」と言われました。アダムは妻エバにもこの約束のことを話して、神様の言い付けを

しつかり守り、毎日楽しく暮しました。神様と交わり、共に歩む日々は、とっても幸せでした。

へびの誘惑

ところがある日のことです。エバが一人である時に、へびが近寄ってきてエバに話しかけました。「エバさん、園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか？」エバは答えました。「わたしたちは、園の木の实を食べることは許されていますが、ただ、園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」(創3・2～3)。へびはニヤリとしながら、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」と言いました。

ここで、ちよつと皆さんと考えてみましょう。神の言葉2章16節とエバの答えた3章2～3節を対比してみましょう(あらかじめ模造紙に黒字と赤字に対比して書いておくとうい)。

まず、へびは「ほんとうに神が言われたのですか」と言つて、神の言葉を疑わせることからエバに近づいています。エバの答えを見てみましょう。エバの答えは正確なものではありませんね。神様は、「善悪を知る木から取って食べるな、それを食べるとききつと死ぬ」とはっきり命じておられます。ところがエバの答えはあいまいですね。しかも自分勝手に解釈している事が対比してみるとよくわかります。そうすると、神の言葉はもう神の言葉ではなくなります。へびはすかさず、誘導尋問につてきたエバに「あなたがたは決して死ぬこと

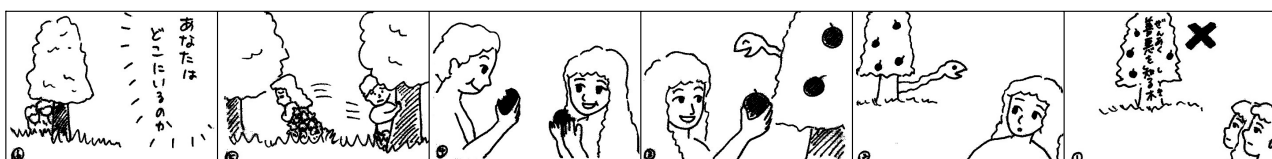
はないでしょう。それを食べると神様のようになるのです」と言いました。

誘惑に負けた結果

エバはへびの言葉に乗せられてその木に近づいて見ると、それはとてもすばらしい実で、目がハートになりました。「神のようになれる」とへびが言ったように、見れば見るほど、その実は食べるに良く、目には美しく、賢くなれるように思えました。エバの心は虜になつて「食べてはいけない。食べるとききつと死ぬ！」という神様の声が聞こえなくなりました。それを取って食べ、アダムにも与えたので彼も食べました。こうして、とうとう誘惑に負けてしまいました。その結果、二人の目が開け、「神様のようになった」自分の姿でなく、何のとりえもない土の器でしかない姿に急に恥ずかしくなり、いちじくの葉をつづり合せて腰に巻きつけました。そして神様を恐れて、木の間に身を隠してしまいました。このようにして、神の言葉を疑ったところから、人は罪に陥つてしまいました。神様は、人をロボットのようには造られませんでした。神のかたちに造り、自分で考える力をくださいました。彼らは、神の約束を守る事を選ぶ自由がありました。ところが不従順の罪に陥りました。しかし、罪を犯して隠れている人に「どこにいるのか」と呼びかけてくださる愛の神様なのです。あなたは「はい、ここにいます」と、答えることができるでしょうか。ぜひ答えて神様と共に歩む日々を過ごしましょう。

♪おももりください主よ♪

(ホーリネス・子どもさんびか100)



聖書 創世記3・10～21

テーマ 神の約束

序論

(鎌野)

人が罪を犯したその直後に、その罪を解決するために神は驚くべきことを用意された。今週の箇所を注意深く読むなら、それがはつきりわかってくるだろう。神は、自分から身を隠したアダムとエバに対して、幾つかの約束を与えられた。それらの約束は以下の三つにまとめられる。

一、神の恵みの約束

神を「恐れて身を隠した」二人に対して、神は「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか」と尋ねられた。アダムは、「わたしと一緒にしてくださったあの女が」と、自分のことは棚に上げてエバに責任をなすりつけている。罪を犯す前には「わたしの骨の骨、肉の肉」(2・23)と自分と一体であることを認めていたにもかかわらず。そこで神はエバに、「あなたは、なんということをしたのです」と言われると、彼女は「へびがわたしをだましたのです」と答えた。エバもへびに責任を押しつけている。自分の罪の責任を他人に転嫁しようとしているこの二人の言い分を、神はあえて反駁せず聞いておられることに注意しよう。神は何と忍耐深いことか。そして、まずへびに対してさばきの宣告をされたのだ。

神はすぐに二人を滅ぼすこともできた。しかし神はそうなさらず、かえって彼らが救われるための約束を用意されたのである。これこそ、神の恵

みと言うことができよう。今でも神は、本来は滅ぼされて当然の者に悔い改めの機会を与え、彼らが神に立ち帰るようにと、恵みの約束を提供しておられることを忘れてはならない。

二、サタンの滅びの約束

へびに対しての「おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べる」という宣告は、へびの生態を示すものであろう。重要なのは、その後の「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」という一語だ。これは、もはやへびという動物に対してのものではない。へびを通して人を誘惑したサタンに対する宣告であり、サタンと人間の間に「恨み」(新改訳と新共同訳では「敵意」が存在することを意味している。この敵意の中で、「彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕く」。つまり、たといサタンが彼(『女のすえ』)に部分的な傷を与えても、彼はサタンを滅ぼすのである。新約聖書との関連から考えると、彼とは救い主イエスのことであり、サタンが主を十字架に追いやったとしても、主はサタンを滅ぼされることを預言する言葉と解釈できるだろう。

エデンの園においてさえ、サタンは人を誘惑することができた。現在でもサタンの誘惑は強烈である。しかし、サタンは必ず打ち砕かれる。主の十字架の贖いのわざが完成した今の時代には、これは明白な事実だ。アダムとエバが罪を犯した直後にサタンの滅びの約束を与えられたのは、神がサタンよりはるかに強いお方だからである。

三、罪人の回復の約束

へびへの宣告の後、神は女に対しては出産の苦しみというさばき、人に対しては労働の苦しみというさばきを宣告しておられる。これらは、確かに二人が罪を犯した結果ではあるが、神が人を憎んで与えられたものではない。出産の苦しみの後には誕生の喜びがあり、労働の苦しみの後には収穫の喜びがあることを銘記しよう。

さらに、アダムが「その妻の名をエバと名づけた」ことも重要である。アダムは「土」だが、エバは「命」という意味である。土から取られ、いずれば土に帰る人に、エバによって新しい命が生まみ出されることを、アダムは自覚していた。

また、「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」ことも見逃してはならない。それまで全ての生物を創造し、命を与えられた神が、ここで初めて動物を殺して皮の着物を二人の罪人に与えられたのである。罪が贖われるためには、犠牲の血が必要であったことがこの出来事の中に暗示されている。主イエスの十字架の約束と理解できるかもしれない。

以上すべては、罪人の回復を願っておられるゆえに、神が与えてくださった約束なのである。

結論

神の意志にさからい、自分勝手に生きようとする人間は、昔も今もどの時代にもいる。しかし神は、彼らが神のもとに立ち帰るよう、救いの計画を用意された。これ以降の聖書の記述は、この救いの計画が実現するための絵巻物なのである。

研究資料

(足立)

テキスト

9513 尋問の場面であるが、神はご自身のものを探し求める寛大な父として記されている。そしてさばきを与える前に、反逆した男と女に対して神の語りかけが問の形で届いている。創造主なる神は全知全能のお方であるが、罪を犯したものに問いかけられる。それは彼らを罪の告白へと導こうとされるお方であるから。あなたはどこにいるのか(9)。あなたが裸であることを、だれが知らせたのか、食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか(11)。あなたは、なんということをしたのです(13)。以上の神の問いかけは人の告白を促すため、悔い改めの機会を与えているのであろう。これに対して、人は自分の罪を女に、更に神に転嫁しようとする。神ご自身が人を悪に誘惑することなどあり得ない(ヤコブ1:13)。そして女は自分の罪をヘビのせいにしようとする。彼女に感覚的な鋭さや、想像力の豊かさがあったとしても、自分の罪に向き合う方向には進まない。本来ならこの語りかけは、直ちに神への罪の告白となり、恵みによる悔い改めの機会となったであろうに。しかし墮落した人はこの機会を全く生かすことができない。これは罪人の頑固さと言うより、罪による原状回復不能の現実を示すものであろう。つまり罪人は自分の力では悔い改めることができない存在となってしまった。悲しいかな、アダムとエバの姿は神が意図したもの(2:18)とは全く正反対となっている。9節の質問は、弟殺しの罪を犯

したカインにも同様に語り掛けられている(4:9) 14519 神の裁断である。先ずヘビに対してであるが、神からの質問はなく、また何ら弁明の機会とは与えられず、刑の宣告だけが提示されている。このさばきは、ヘビとサタンの両者への言及と思われる。このヘビへの呪いは、必ずしもヘビがかつて他の動物と同様に歩行できたと暗示しているわけではない。むしろ焦点は、呪いの結果としてヘビの残りの生涯が**ちりを食べる** ことにある。聖書においてちりは、絶望的な状態を象徴し(詩篇44:25、72:9)、壊滅的な敗北を意味する(イザヤ25:12、ミカ7:17)。のろいと訳されることばの語根は旧約聖書に数多く登場し、モーセ五書で際だって使われている。創世記では8回(3:14、17、4:11、5:29、9:25、12:3、27:29、49:7)。特に重要なのはイスラエルの契約に關して祝福とのろいが取り上げられている点(申命記27、28章)。

15節はしばしば「原福音」と呼ばれ、聖書で最初のメシヤ預言と見なされてきた。詳しい説明は『新聖書注解・旧約1』、『実用聖書注解』(いのちのことば社)の創世記3:15を参照。

女に対しては、本来神によって祝福された出産(1:28)が苦痛を伴うものとなったことが述べられている。そして助け手(2:18)であるはずの夫が、支配と隷属の關係をもたらすと記されている(2:23、24)。夫婦の一致と調和の崩壊。

男に対してのさばきは、創世記11:2章で創造主なる神によって提供された良き地が男のゆえにのろわれた点にある(参照ローマ8:19、22)。男

はもはや地の産物を自由に食べることが出来なくなった。2、3章は「食べることを一つのテーマとして、創造主なる神と人との継続する關係を見る」ことが可能。最初神は人に **園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい**(2:16)と祝福と供給を約束された。これは1:31の宣言を想起させる。ところが3章においては、「食べることを」により誘惑者が神の究極的善と人とその妻に対する配慮に対して、疑念を起こさせた(3:1、3)。そして最終的には人とその妻の不従順により、食べてはならないものを食べたのである(3:6)。男に対しては、罪の結果の重労働とそれ故の死が宣告されている。

20521 長いさばきの宣言後に、二つの出来事が二人に希望を与えている。一つはアダムが妻の名をエバと付けたこと。ここには3:16の約束を信じることで神への回復を願うアダムの心が伺える。二つ目は、神が人の裸を覆うために、いちじくの葉をつづり合わせたもの(3:7)の代わりに、皮の衣を作って人に与えられたこと。二人の裸を覆う衣が、神によってのみ与えられたことが中心の意味であろう。神の罪人へのあわれみである。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約1』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、Hamilton, V. P., The Book of Genesis Chs. 1-17 (Eerdmans), Mathews, K. A., Genesis 1-11:26 (Broadman) Sailhamer, J. H., 'Genesis', The Expositor's Bible Commentary, Vol. 1.2 (Zondervan)

聖書 創世記3・10～21

タイトル 神の約束

暗唱聖句

わたしは恨みをおく、おまえと

女のあいだに、おまえのすえと女

のすえとの間に。創世記3・15

目 標

すかさず与えられた神の約束に

神の愛を見る。

導入

(松浦み)

罪を犯したアダムとエバは今までのように神様と楽しく交わる事ができなくなつて隠れてしまいました。神様は「あなたはどこにいるのか」と呼びかけてくださいましたね。今日はその後の二人のようすと神様の約束を学びましょう。

神様から隠れたアダムとエバ

神様を恐れて身を隠した二人に、神様は「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。取つて食べるなど命じておいた木から取つて食べたのか」と尋ねました。すると、アダムが「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取つてくれたので、わたしは食べたのです」と返事をしました。まるで、神様に責任があるような言い方ですね。そこでエバに「あなたはなんということをしたのです」と言われると、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と答えました。彼ら二人は、神様に尋ねられた時、アダムはエバのせいにして、エバはへびのせいにして、一言も「こめんなさい」と言いませんでした。

サタンに対する滅びの約束

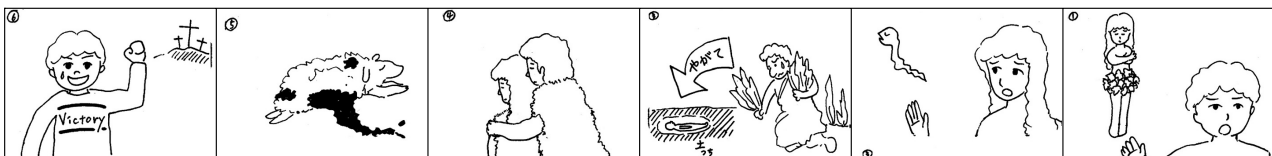
へびに対して神様は、「すべての家畜、野の獣のうち最もものろわれ、おまえは腹で這い歩き、一生ちりを食べる」と言われました。それだけでなく「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女との間に」と宣言されました。へびを通して、人を誘惑したサタンに対して、神様はサタンと人間の間に子々孫々にいたるまで戦いがあり、恨み(敵意)をおくとされたのです。しかし、女の子孫がやがて「おまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と預言されました。このことは、やがて女のすえから生まれるイエス・キリストを通して、サタンを滅ぼすという人類の救いの預言をされたのです。彼のかかとを砕くとは、サタンが人々の心に働きかけて、やがて生まれてくるイエス・キリストを十字架に追いやり、十字架上で殺すということの意味します。また、おまえのかしらを砕くとは、イエス・キリストの十字架と復活は、サタンのもたらした死と罪を滅ぼし、完全に勝利することを意味します。このように神様は罪に陥った人間に、サタンの滅びの約束をしてくださいました。

救いの希望

アダムはその妻の名をエバ(いのち)と名づけました。いのちを与える者という意味です。へびはエバを誘惑した時、「食べても決して死なない」と言いましたが、神の約束を破った結果、「食べる時にと死ぬ」と言われていたように、人は死ぬ者となりました。神様は、アダムに「あなたは、一生苦し

んで働いても最後は死ぬのです。そして、ついに土に帰ります」ときびしい裁きを宣言されました。「なぜなら、あなたはちりから造られた者だから、ちりに帰る」と。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)と聖書に書かれているとおりですね。しかし、アダムは、妻の名をエバと名づけたのです。彼はエバに対する神の裁きのことは「あなたは苦しんで子を産む」を聞きつつ、主によって新しい命が生み出される事に希望をいだきました。それは、やがて女の子孫が、サタンのかしらを砕くという神の約束を信じてきたからです。また、神様は二人のために、皮の着物を作ってくださいました。いちじくの葉はすぐにダメになつてしまいますね。神様は動物を殺して彼らのために皮の着物を作り、着せられたのです。罪のない動物が犠牲となり血が流されました。二人のために、皮の着物を作ってくださいった神様は、やがて私たちが汚れない衣を着て神様にお会いすることができるよう、罪なきイエス様の犠牲の血をもつて救いを完成してくださいました。「神の賜物は永遠のいのちです」(ローマ6・23)。

イエス様はこのように後の日、罪に陥ったエバの子たちを救い出してくださいました。今を生きてもイエス様の十字架を信じるなら、救われサタンに勝つことができるのです。神様はなんという愛に満ちた方でしょう。罪に陥った人間のため、すかさず救いの道を用意してくださいましたのですから。♪天の神さまのまえで♪(福音子どもさんびか28)



聖書 創世記5・21～24 テーマ エノク

序論

(鎌野)

アダムとエバは、罪を犯したためにエデンの園から追い出された。しかし、神は彼らとその子孫を忘れ去られたのではない。アダムから7代目のエノク、そして10代目のノアを見るなら、神は信仰によって歩んだこの二人に、特別な恵みを与えられたことがわかる。まず今週はエノクに焦点をあて、彼の生涯の特色を学んでみよう。

一、他の人々より短命だった

創世記5章は、アダムからノアに至るまでの系図である。全員驚くほど長寿で、ほとんどが900歳以上だ。最長寿のメトセラなどは969歳まで生きているので、聖書の記録に疑問を感じる人もいだろう。しかし、現在よりはるかに自然環境が良かったことを考えるなら、これは決して誇張された表現ではない（だが神は後に、人の寿命が120年に縮められることを宣言なさっている。6・3参照）。そういう人々の中で、エノクの寿命は365歳だった。メトセラの3分の1ほどしかない。

長寿を求める人々は、エノクの生涯が不幸だったと考えるかもしれない。けれど、本当にそうだろうか。現代でも、病気や事故などで若くして亡くなる人々もいる。そういう人々は皆、不幸なのだろうか。聖書は決してそのように記していない。永遠をご覧になる神にとっては、この地上の生涯だけが人のすべてではないからだ。

二、神とともに歩んだ

エノクについての記述は、5章の中でたった4節しかないにもかかわらず、彼は「神とともに歩み」と、二度も繰り返されている。しかも、そのように記されているのは、この系図においてはエノクしかない。いや、創世記の冒頭から読み直してみればわかるのだが、エノクこそ、「神とともに歩んだ」と明記される最初の人物である（ちなみに、第二の人物はノア）。

神の言葉にそむいたアダムとエバは、神から身を隠すような者になった。その結果、神と共に生きることできたエデンの園から追放されざるをえなかった。しかし、彼らの子孫の中に、神とともに歩むことを求めた人物がいたのである。たといこの地上における生涯が短くても、その日々を神とともに歩んだのが、エノクであった。

神から身を隠して生きていくか。それとも神とともに歩むか。それは一人一人が決めていくべきことである。この系図の他の人々がどうであったか、聖書は言及していない。だがエノクについては、明確に神とともに歩む生き方を選び取ったことをはっきりと書いているのである。

三、神が取られた

この系図は、一人一人の最期を「そして彼は死んだ」という定型句で結んでいる（5、8、11、14、17、20、27、31）。しかし、エノクだけは「神が彼を取られたので、いなくなつた」と記すのである。これはどういう意味だろうか。新約聖書のヘブル書の著者は、はっきりとこう記している。「信

仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼は見えなくなつた」（11・5）。エノクは死んだのではない。「天に移された」のである。具体的に彼の肉体がどのようになつたかはわからないが、当時の人々の目には見えなくなつた。エリヤの場合もこれと似ており、「エリシャは」再び彼を見なかつた」と記されている（列王下2・12）。

ヘブル書は、先の引用文の後、「彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである」と宣言する。神とともに歩むことは、神が喜んでくださることである。それゆえに、神はエノクを天に移された。彼が短命だったことは、彼の肉親や友人にとっては悲しいことだったかもしれない。しかし、主なる神は彼を喜ばれたからこそ、その地上の生涯は短かったが、肉体の死を経験させないで、天に移されたのである。

私たちもエノクのように生きたい。どんな時でも主がともにおられると確信して歩もう。主は私たちのすぐそばにおられるのだから、試練の時には「主よ、助けてください」と叫び、喜びの時には「主よ、感謝します」と祈ろう。そのような交わりは、私たちにとっても喜びだが、だれよりも主ご自身が喜んでくださるのだ。

結論

アダムの子孫は、エデンの園の外で労働と出産の苦しみを経験せねばならなかつた。しかし、苦しみの中でも神とともに歩むことができる。それこそが、本当の喜びを生み出すのである。

研究資料

(足立)

人間の罪と死(2・4・4・26)の説明後、著者は人が罪の影響を継承していることを示すと共に、出産と祝福という神の約束が受け継がれていることを系図(トーレードス)という手段で提示している。アダム(5・1)の家族はセツを通して子孫が続く、セツの系図はカインのそれ(4・17・24)と対応物となっている。また5・1・6・8の系図(トーレードス、参照2・4、5・1、6・9、10・1、11・10、11・27、25・12、25・19、36・1、36・9、37・2)区分により、創世記そのものの枠組みが理解できる。天と地の由来(トーレードス、2・4・4・26)とノアを頂点とする大洪水の出来事(6・9・9・29)とを橋渡しすることが、5章の系図を記した著者のねらいである。

そして神のかたちとしての人間が創造されたこと(5・1・2)を復唱することにより、1・26・28にある神聖な命令を確認することにもなる。

テキスト

21・22 セツ(5・3、6)の家系の第七代目として、エノクは10人の名前の中で特筆されている。字義的にもこの章で大いに繰り返される図式から特出することにより、エノクの生涯が自らの先祖から識別されている。神とともに歩み とは滅多にない表現である(創世記5・22、24、6・9、マラキ2・6)。これは単に敬虔な生涯を生きたというのではなく、信じられないほど不断の神との交わりを楽しむことを意味する。彼はこの墮落し

た世界で神とともに歩んだ。このエノクの生涯の特徴は、24節に出てくる表現にあるとおり突出したものであった。彼が何故死ななかつたかを説明するために「神とともに歩んだ」と記されているのだろう。動詞「歩む」(ハラク)は、神との親密さを意味する言葉である。それはアダムの最初の経験(3・8)を想起させ、神への従順で覚えられるノアにも使われている(6・9)。更に神がアブラハムに信仰の深さを求める場合にも同類語が使われている(参照新改訳、創世記17・1、24・40、参照48・15)。後のイスラエルにおいてこの神聖な臨在のニユアンスは、宿営の中を神が歩むという個所で神とイスラエルとの契約的親密さが述べられている(例、レビ26・12、申命記23・14)。また詩人にとって神と共に歩むとは、いのちと幸いを意味する(詩篇56・13、116・9)。

23・24 エノクを評価する特有の言及はそれ自体で十分であるが、24節には驚くべき一文が加えられている。彼がいなくなつたのは明瞭だが、不明瞭な表現が成されている。エノクが消えたことに関する説明は、等しく**神が彼を取られた**のと言ふ本文によっておわれている。「取る」(ラカフ)は普通のヘブル語で、様々な意味を持つているが、最も単純には「取る、行つて取ってくる」となる。人の命が取られる(列王上19・10、14)こと、或いは逆に人の命が死から救い出される(詩篇49・15)ことで、死に言及するのかも知れない。同じ動詞が、竜巻の中に主が取られたエリヤの昇天に關しても出てくる(列王下2・1、3、5、9・11)。また詩人も命が榮光のうちに取られるこ

とを期待している(詩篇73・24)。ヘブル書の著者は、エノクが死を経験しないで移されたことの意味を明確にしている(ヘブル11・5)。それは彼が神に喜ばれていたから。

アダムはエデンの園から締め出され、カインは神の臨在から引き離されたのに対して、エノクは自分の死を逃れる特権を得た。エノクが移されたことは、神の救いのご計画が広げられたと言えよう。それはいのちの約束と祝福を成就させる意図を、神があわれみのうちにしるしとして立証されたと言えよう。セツの家系へのあわれみにより、神のみ心は選びのうちにあらることがわかる(例、アブラハム)。

エノクの年は合わせて三百六十五歳であった 5章の系図に名を残す者たちから見ると、エノクの生きた年月は他の半分以下となる。間違ひなく24節が主の祝福を語っていると考えられるので、エノクの生涯は幸いであつたと言えよう。また苦難や苦悩の多い地上の生涯からいち早く解放されたとも理解できる。しかし聖書は基本的に長寿を祝福と認めている(例、出エジプト20・12、申命記5・16、11・9、エペソ6・3等)ので、短い生涯が祝福とは簡単には言えない。むしろ地上の年月の長短では表せない主の恵みが、エノクの上に特別にあつたことが主張されているのだろう。

参考図書 舟喜信「創世記『新聖書注解・旧約I』(36のつづき)社」Hamilton, V.P. The Book of Genesis Chs. 1-17 (Eerdmans), Mathews, K.A. Genesis 1-11:26 (Broadman), Waltke, B.K. Genesis (Zondervan)。

聖書 創世記5・21～24

タイトル エノク

暗唱聖句 エノクは神とともに歩み、神が

彼を取られたので、いなくなっ

た。 創世記5・24

目標 エノクのように、神と共に歩む

者となる。

導入

(松浦み)

最初の人、アダムとエバは罪を犯したため、エデンの園から追い出されてしまいました。その後の人々はどうなったのでしょうか。今日学ぶのはアダムから7代目のエノクです。

アダムみなの系図

皆さんのお家や教会におじいちゃんやおばあちゃんがおられることでしょう。いったい何才でしょう。聖書のアダムの系図によると、アダムは930年生きて、死んだ。セツは912年生きて、死んだ。一番長生きした人はメトセラで969年生きて、死んだ。というように書かれています。ヒエー、ウツソーと思うかも知れませんが、みんなびつくりするほど長生きしています。そんな中、アダムから7代目のエノクの寿命は365歳で他の人に比べると短命でした。そして、エノクは他の人とは違った歩みをしたことが記されているのです。

エノクの目覚め

エノクも他の人と同じように、65歳になってメトセラを生みました。ところがメトセラを生んだ後、エノクの人生に大きな変化が起こったのです。

メトセラの誕生とともに、信仰に目覚め、その時より300年神様と共に歩んだのです。エノクは長男の誕生によって、大洪水のさばきが長男の死後来るという神の声を聞いたのでしよう。彼はその子をメトセラ（彼が死んでからそれが送られる）と名づけました。メトセラが死んだ年は大洪水の年に当たります。

エノクの生きた時代はどんな様子だったのでしょうか。人々は、神様を恐れず、信仰を無視して、自分勝手な生活をしていました。人殺しや暴力事件は絶えず起こり、人をいじめたり、だましたり、ねたんだり、うらんだり、罪に満ちた世界でした。そのような時代の中であって、彼は神様を信じ、神様と共に歩んだのです。アダムから7代目に当たるエノクが、当時の不信心な人々に対して、神のさばきがあることを預言したことが、ユダの手紙14～15節に記されています。エノクの目には、神のさばきによってその代が終わることが、信仰によって見えていたのです。ですから、彼は地上のものに心ひかれることなく、ひたすら神様に喜ばれる生活を送ったことが想像できます（『聖書人物伝』沢村五郎著参照）。

神様と共に歩む秘訣は？

皆さんはれんこん好きですか？穴のあいたれんこんは、泥水の中で育ちます。れんこん畑に行くときとまーい大きな葉っぱの間から、空に向かってピューと茎が伸び、れんこんの花が咲きます。それは、それは、清らかな美しい花です。周りがどんなに汚い泥水であつても、その花には少しも汚れはありません。清らかさで輝くような花なので

す。エノクの生きた時代は、泥水のように、汚れが満ちた時代でした。しかし、周りはどうなにか汚れていてもエノクは、きよい勝利の生涯を歩みましました。聖書にはエノクの生涯がこのように記されています。「信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです」（ヘブル11：5新共同訳）。なんてすばらしいことでしょう。そして、神様に喜ばれる秘訣は「信仰」だと教えられています。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならぬからです」（ヘブル11：6新共同訳）。

私たちも神様と共に歩もう

エノクは、神様を信じ、どんな時も神様に信頼して生きました。私たちの生活にもいろんなことが起こるでしょう。うれしいことがあつたとき天狗になつて、自分の力を誇ることもないように、神様に感謝しましょう。迷った時、困ったことが起こったとき、ヤケを起こさずに、神様が共にいてくださることを信じて祈りましょう。いじめに遭うことがあるかもしれない。神様に助けてくださいと祈りましょう。寂しい時も、悲しい時も、病気の時も、どんな時も、神様に信頼しましょう。神様と共に歩む日々はどんなにすばらしいものか、あなた自身も体験してください。そして、証しましょう。祝福が豊かにあることを祈ります。

♪イエス様がいたばん♪

(友よ歌おう2)



聖書 創世記6・1～22

テーマ 全き人ノア

序論

(鎌野)

エノクと同様、神とともに歩んだもう一人の人物が、今週から4週間にわたって学ぶノアである。彼の時代、人が地のおもてにふえ始めた。神は、人を創造された後に、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」と命じられたのだから(1・28)、これは喜ばしいことであるはずだ。だが、アダムとエバの罪の性質がその子孫に受け継がれていたゆえ、悲しいことに、人は「その心に思いはかることが、いつも悪い事ばかり」になってしまっていたのである。しかし、ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。そこで神は、彼を通してご自身の救いの計画を実行しようと考え、彼に次のことを告げられたのである。

一、さばきの告知

2節の「神の子たち」とは、神を信じて生きていた人々のことであろう。彼らは神を信じない人々の娘たちが美しいのを見て、妻にめとった。そして生まれた者は「ネピリム」と言われ、「勇士であり、有名な人々であった」。だが、どんなに美人であり、勇士であっても、「その心に思いはかることが、いつも悪い事ばかり」であっては、神の創造の目的に合わない。そこで「主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め」、被造物を「地のおもてからぬぐい去ろう」とさばきの決断をされたのだ。神のさばきは、怒りのゆえではなく、痛み

のゆえであることを忘れてはならない。

確かに当時、「神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである」。本来は、互いに愛し合い、助け合って生きていくべきなのに、実際は「暴虐が地に満ち」ているのを見て、神は、もう一度やり直そうとされた。そこで目をとめられたのが、「神とともに歩ん」でいたノアであった。神は、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した」と言いながら、ノアは全き人だと認めて、これからしようとすることを彼に告げられたのである。

二、救いの告知

神は、洪水によって地をさばかれることをノアに知らせ、洪水から救われるために、「いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい」と告げられた。箱舟の大きさも明示されている。1キュビトを45cmとすると、長さ140m、幅23m、高さ14mほどで、3階建ての総面積は約1万m²にもなる。100m四方のグラウンドと同じ広さだ。この大きな箱舟に、ノアだけでなく、彼の妻も3人の息子夫婦も入るように神は命じられた。神はまた、「すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと共にその命を保たせなさい」とも言われた。神とともに歩んだノアのゆえに、彼の家族も、またすべての生き物も救われる道が告げられたのである。

ノアとは、「慰め」という意味である。父レメクは、「この子こそ、主が地をのろわれたため、骨折

り働くわれわれを慰めるもの」になってほしいと思っそう名付けた(5・29)。確かに彼はそういう人物だった。神は、神に背いて悪を行う者たちをさばかれる。しかし、神とともに歩む者については、その人だけでなく、その人を通して、さらに多くのものを救ってくださるのである。

三、契約の告知

神が「わたしはあなたと契約を結ぼう」と告げられたことにも注意しよう。これが、「契約」という言葉が聖書の中に出てくる最初の例である。この契約の内容は9章で示されるが、ここで強調されているのは、神の言葉に従うことである。もしノアが言葉に従わなければ、神の救いの計画は実現しない。神との契約は、人がそれに従うことによってはじめて成り立つのである。

ノアが「正しく、かつ全き人であった」と記されているのは、地上に悪人がはびこっていた時代においても、神の言葉を聞き、また、「すべて神の命じられたようにした」からにほかならない。現代でも全く同じ原則があてはまる。重要なのは、神の言葉を聞き、それに従うことである。多くの人々が自分の好きなように生きているとしても、彼らと同じように生きてはならない。

結論

ノアの時代には、聖書はなかった。彼は、ただ良心に響く神の声に従ったのである。今は、神のみ心を明確に示す聖書があり、それを説く教会もある。謙遜に聖書に聞き従う者となろう。

研究資料

(足立)

テキスト

1 地上に悪が増大(6・5)したことで神のさばきが行われるのであるが、神の子たちと人の娘たち(6・2)との間の男女関係が倫理的低下の方向に寄与していると、この節はほのめかしている。このことは、①3節のさばきの宣言、②2節と5節の「見て」という表現、③神の罪への対処(6・5)から提示され得るだろう。本質的にこの1節は、4〜5章にある人間の生活の発展と拡大による描写を伝えているが、人口増加と聖なる結婚様式との間にある結びつきをも表面化させている。

そもそも人が地上に増えることは創造直後の神の祝福(1・28)と理解できるが、墮罪後の状況下では悪の増大につながっている。本来意図された性的な結びつきの祝福は、神の倫理的秩序に人間家族が従うことで付随してくるものである(例2・7、2・24)。人間が神に依存しないで成し遂げたことは、傲慢な誇りに結びつく(例、3・6、6・4、11・1〜9)。神聖な祝福か、或いは懲らしめかは、人間の行動と関連する。

2 神の子たち 文脈からして人間の悪の増大という流れを考慮に入れると、神の子を天使とするには無理があろう。神が人の悪をさばかれると言う脈絡(6・5)からして神の子は人と推察される。彼らの行動は、エバの罪(3・6)を連想させる言葉で記されている。見て、美しい、めとった彼らは自らの官能的欲望に導かれ、神のかたちとして生きる(参照5・1〜2) 霊的な認識が欠落

している。自分の感覚によって一生の問題を決定していく愚かさ。明らかに2・24に基づいていない。

3 ここも解釈困難な箇所。2節では人の同棲(神のみこころとは違う性的関係)の様子が描かれ、4節では不品行によって生まれた子どもたちへの言及が成されている。その両節の間にこの3節が置かれていて、著者は、この禁じられた性交渉それ自体が主に反逆すると言う点を明らかにしているのだろう。百二十年 これは個人的寿命の短縮ともとれるが、むしろ主のこの宣言と大洪水(参照5・32、7・6)までの期間の長さを意味するのではないだろうか。神のさばきには恵みによる執行猶予期間がある(参照Ⅰペテロ3・20)。120年遅らすことにより人々が悔い改める時を与え、ノアとその箱舟を通してのさばきが来ることを証言している。

5 主は…悪い事ばかりであるのを見られた 創世記1章では神は良いことを見られたが、ここでは全く逆の事が述べられている。今や人間の行動は地を墮落させてきた。地を眺められるこの行為もまた、神は状況を十分承知されてからさばきをなさる事を意味している(参照3・8〜14、19・21)。すべてその心に思いはかること これはその深みを鮮明に描写していて、人間の墮落のほどが理解できる(参照8・21)。この状況はキリスト再臨時における歴史の終局を彷彿とさせる(ルカ17・26〜27、18・8、Ⅱテモテ3・1〜5)。

6 悔いて 神は「人ではないから悔いることはない」(サムエル上15・29、民数記23・19) お方である。神の創造のみわざはどこまでも完全で、悔

いることはない。けれども神は全能の機械ではなく、生きた聖なるお方である。関心の的である人間の態度に敏感に反応され、完全に対応される。この反応や対応を表現する上で、人の言葉を用いて、「悔やむ」「残念に思う」「思い直す」等が記されている(参照、出エジプト32・12、14、サムエル上15・11、サムエル下24・16、エレミヤ18・10、11、アモス7・3、6)。

7 地のおもてからぬぐい去ろう 罪の広がりがあるままさばきの広がりとなっている。大洪水により洗い落とされる。キリスト再臨時には火によるさばきとなる(参照Ⅱペテロ3・5〜7)。

8 思う存分悪を行う人間の中にあつてノアだけが主のみこころになつていた。

9 正しく 聖書において「正しい」という言葉が最初に使われている。義とは敬虔と倫理性が結合していること。全き これは字義的には、全身で行う「十分なる」ことと、関係の完全性を意味する。全きことと正しさがペアで使われていることにより、ノアが義に生かされていたことを提示している。全きとは罪から離れていることを意味するが、罪がないと言うことではない。ダビデは姦淫と殺人を犯したが、「わたしは主の前に欠けた所なく」と主張している(サムエル下22・24)。

参考図書 舟喜信「創世記『新聖書注解・旧約Ⅰ』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記『実用聖書注解』(いのちのことば社)」、Hamilton, V. P., The Book of Genesis Chs1-17(Eerdmans), Mathews, K. A., Genesis 1-11:26(Broadman), Waltke, B. K., Genesis (Zondervan)。

聖書 創世記6・1～22
 タイトル 全き人ノア
 暗唱聖句 ノアは神とともに歩んだ。
 目録 全き人と言われたノアを知る。
 創世記6・9

導入

(光田)

夏休みに入って2週間が経ちました。暑い毎日ですが元気でしょうか。

さて、皆さんには何でも話せる仲の良い友だちがいますか。今月は神様から特別に信頼され語りかけられたノアの話です。ノアの名前は「慰め」という意味です。神様のお心を慰めることができるような信仰をもてるならどんなに素晴らしいでしょう。今日はまず、神様に全き人と見られていたノアの信仰を学びましょう。

神様の悲しみ

ノアが生きていたのは、アダムから始まった人類が地上にどんどん増え広がり始めたときです。人間は、神様の言葉に聞き従うことで幸せになるはずでした。けれども、アダムがエデンの園で罪を犯して以来、人間が増えるに従って、罪もますます増えてしまいました。神様のお心が痛むような悪がたくさん行われました。いじめや殺人、盗みなど、今の私たちの社会とあまり変わらない様子だったのではないのでしょうか。

アダムは930歳まで生きました。大洪水前は有害な宇宙線が少なかったので、みんなとても長生き

でした。けれども神様を無視した生き方をして、どんどん悪くなっていく人間をご覧になった神様は、人間がいつまでも長生きしないようにと考えられ、人間の一生を120年に定められました。

そして神様はもう一つ、「わたしが創造した人々を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも」と決められました。きよい神様は、悪がはびこることや、人が罪に染まって汚れ続けていくことを、そのままにしておくことはおできにならないからです。神様は人間を造ったことを悔いました。

神と共に歩んだノア

けれどもその中で、ノアだけは別でした。神様はノアを喜んで、目を留めてくださいました。では、ノアはどのように他の人たちと違っていたのでしょうか。ノアは全き人、完全な人と呼ばれています。神様に認められた完全な人とは、どのような人のことでしょうか。それは、勉強やスポーツが何でもできる人のことではありません。また、失敗を一つもしない人のことでもないのです。

ノアは神様を信頼し、神様に従い、神様と共に暮らしている人でした。ノアの完全さとは、信仰のことです。ノアは神様のお喜びになることをいつでもしようと心に決めていました。神様から祝福を受ける人とはこのような人です。神様に従わない大勢の人の中で、たった一人ノアだけが神様の目に留まったのです。神様が完全な人と見てくださるのが信仰のことだとするなら、全き人と呼ばれるのは、大人だけではありません。皆さんの

ような子どもでも、神様を愛して、心から従おうとしているなら、その人は全き人です。

神様の計画

神様はノアに声をかけられました。「わたしは、全ての人を絶やそうと決心をした。暴虐が満ちたこの地と、人間を共に滅ぼす」。神様は、罪がいっぱいになっている世界を、新しく創り直そうと考えられました。そこで、神様が信頼されたノアに、箱舟を造るように命じられたのです。箱舟は、いとすぎの木で造り、舟の中に部屋を作って、アスファルトでそのうちを塗ります。箱舟の長さは140メートル、幅23メートル、高さ14メートル、それから45センチメートルの高さの屋根、戸口は横3階建てです。こんなに大きな舟を造るために、100年ほどかかったかもしれません。

また全ての生き物から雄と雌をペアで入れ、鳥や獣、這うものは、種類に従って集めるように命じられましたから、あちこち出かけて動物や鳥を捕まえなければなりません。ノアの家族と生き物全ての食物も箱舟の中に積み込むのは、とても大変な仕事だったはず。けれども、ノアと家族は、神様が命じられたように行いました。

まとめ

神様に喜ばれる完全な人とは、神様のお言葉に聞き従う人のことです。ノアは信仰者の良い模範です。私たちも神様に喜ばれるように、聖書を読みお祈りをし、毎日神様と共に生活しましょう。

♪主イエスと共に♪ (福音子どもさんびか90)



聖書 創世記7・1～24 テーマ 大洪水

序論

(鎌野)

聖書に記されているこの大洪水が局地的なものか、あるいは全地球的なものかについては、いろんな意見がある。しかし、古代オリエントだけでなく、全世界には多くの洪水物語があることや、地質学的にも大洪水の形跡があることは、考慮すべき点である。少なくとも、聖書の記事は神話ではなく、歴史的事実であることについては、確信をもっている。聖書は、大洪水を単なる自然現象としてではなく、人の罪に対する神のさばきとして扱っている。そこには三つの意義がある。

一、予告されたさばき

6章で神が洪水を予告してから、ノアは神に命じられたように箱舟の建造に取りかかった。あのような大きなものを当時のつたない技術で造るとなると、かなりの期間が必要だったに違いない。それは、最長100年に及ぶ(ノアが50歳の頃に息子たちが生まれ、実際に洪水が起こったのは60歳の時だったから)。この間、人々はノアの建造作業を見ていただろうし、ノアも洪水が起こることを人々に伝えていたであろう。しかし、ノアには弟妹がいたが、彼らさえも箱舟には入らなかった。ノアの父のレメクは、幸か不幸か、洪水の5年前に死んでいる(以上5・30参照)。

「神のさばきがある」という警告の言葉は、多くの人々にとって耳障りである。予告されても、

真剣に聞こうとしないのである。主イエスは、同様なことが将来おこることを予告された(ルカ17・26、27)。聖書は終始一貫、神のさばきがあることを予告している。しかし、現在でも、どれほどの人々が耳を傾けているだろうか。

二、御旨によるさばき

箱舟が完成した頃、神は再びノアに、「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい」と言われた。ただし、「すべての清い獣」と(空の鳥)の中から、二つずつではなく、七つずつ取るように命じられている(それらは彼らの食用になっただけでなく、8・20に記されているように、水が引いた後、神に犠牲としてさげられた)。さらに神は、「七日の後、わたしは四十日四十夜、地に雨を降らせ」と告げられた。そして、「ノアはすべて主が命じられたようにした」。さばきは、天地の支配者である神の御旨によつて起こされる。ノアはただ神の御旨に従うだけであった。

7日間、ノアとその家族は動物を箱舟に入れるのに必死だったであろう。それ以前から準備していなければとてもできないことだ。あるいは、神のさばきから救われてほしいとの熱い思いがあったからこそ、親戚の者や友人たちに、最後の訴えをしたかもしれない。しかし、残念なことに、箱舟にはいる者はいなかった。そして、すべての動物がはいった後、「主は彼のうしろの戸を閉ざされた」。これは、救いの時が完了した決定的瞬間である。ノアの意志ではどうすることもできない時、神に委ねざるをえない時だった。

三、徹底的なさばき

洪水の原因は、「天の窓が開けて」との表現で示される大雨ばかりではなかった。(大いなる淵の源)とは、巨大な地下水脈のことだと思われる。あるいは海面の突然の隆起という学者もいる(『新聖書注解』)。巨大津波のようなものだろうか。それが40日に渡って続いたのであるから、「山々は皆おわれた」という表現も、誇張表現だと断定することはできない。その結果、「地の上に動くすべて肉なるものは、鳥も家畜も獣も、地に群がるすべての這うものも、すべての人もみな滅びた」。徹底的な神のさばきの描写である。

聖書は、次のさばきは水ではなく火によつてなされると言う。「その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」(Ⅱペテロ3・10)。この預言のみ言葉は、将来、必ず成就する。正義の神は、悪を徹底的にさばかれることを覚えていよう。

結論

聖書は、現在の世界に警告を発している。それは、私たち人間が悪を離れて正しく生きるためである。神を無視して悪を行っている者は、必ずさばかれる。しかし、罪を悔い改めて主イエスを信じ、箱舟の中にはいるように、十字架のもとに逃げ込むなら、さばきから救われる。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(Ⅱコリント6・2)。だが、いつかは恵みの日が完了することを忘れてはならない。

研究資料

(足立)

テキスト

1 あなたが：正しい 「あなた」は単数であるが、家族の他の7人が正しくないという結論を引き出しているのではない。エゼキエル(14・20、18・20)によれば、ノアの正しさが彼の家族を救うのではない。むしろ神が家族のメンバー一人一人の責任を取ってくださっている。確かにハムは大洪水後卑劣な行為(創世記9・22)をすることになるが、ノアも罪を犯す。神は大洪水からハムを救い、彼を祝福する。ノアの呪いはハムの子カナンに降りかかる。**わたしは認めた** ノアの正しさは神から恩恵を得ようとするわざではなく、神への信頼から出てくるもの。既に言及されてきた箱舟を製作し、備えてきた場面に見られるもの(参照ヘブル11・7)。**この時代** ノアがその時代に神との関係において正しく生きたことにより、彼の家族と生きた動物たちを救うことになる。また大洪水後に彼がいけにえをささげたことにより、後の時代の人々に救いを提供したことになる(参照8・21)。

2と3 この7章はノアの箱舟の竣工を前提としている。ここで舟に入ることに先立って、ノアに最終的かつ詳細な指示が与えられた。**清い獣の中から雄と雌とを七つずつ取り**… この目的は種族保存が中心にあるが、いけにえ(8・20)や大洪水後の食糧(9・3)をも含んで指示されていると考えられる。**七つずつ** 6・19、20では「二つずつ」と言われているが、ここでは清い動物に関

しての例外の言及と受け止めればよいだろう。**空の鳥の中から雄と雌** 地を満たすために先取りの命令(8・17、9・1)。

4 七日の後 動物の群れが箱舟に入り込み、適用するには7日間が必要である(参照8・10、12)。しかしながらノアとその家族は大洪水が始まる日に箱舟に入った(7・13)。**地のおもてからぬぐい去ります** 神が地を一掃する担い手として強調されている。地は、人間が罪を犯した(例、3・17、19、5・29、8・21)結果、のろわれた土地として言及されている。神の報いとしてのさばきは人の罪に起因するが、祝福の可能性を含んでいる。**四十日四十夜** 7日は古代イスラエルの暦を構成する上で特徴を持つが、40もまた族長時代やモーセの下で、イスラエルが経験する注目すべき出来事において象徴を示す数字である。(参照、創世記25・20、26・34、出エジプト24・18、34・28、民数記14・33、申命記2・7、9・11、18、25、列王上19・8、使徒7・23、30、36)。

5 ノアはすべて主が命じられたようにした 彼は神の明快な命令に対して、慎重に注意を払い行動した(参照6・22、7・9、16)。この実行と服従を示す言葉は、モーセが幕屋を完成する個所で再び聞かれる(出エジプト40・16)。イスラエルは族長時代からモーセの指導による期間に神の命令に従うことを学んでいくのだが、契約への忠誠に生きるモデルとしてノアを見ることになる(比較、出エジプト39・32、42、民数記1・54、2・34、9・5)。神の言葉の真実が記されるとき、ノアの行動は後の世代に対して信仰の従順と効果の

見本となっている(例、ヘブル11・7)。差し迫る大洪水を待つ間、乾いた土地で箱舟を作るノアの大胆な行動によって、未だ見ぬことを信頼する人の何たるかがよくわかる(ヘブル10・38、11・1、2)。約束の言葉を忍耐深く信頼する信仰は、終末の火によるさばきの日を嘲笑う者たちに対しても大きな挑戦となる。さばきの日を宣告する神聖な言葉(Ⅱペテロ3・7、参照Ⅱペテロ2・5、9、10)は、ノアの時代の大洪水と同様に確実に実現する。

16 主は：隠された 神の行為が、6と16節の結論の頂点として際立たされている。ノアの救いは聖なる恵みに基づいている。迫り来る大洪水により箱舟が転覆しないよう、神の行動が聖なる守りを伝達している。神の恵みのみわざは主権的であり、独特である。

21と22 大洪水により、命の全体的な喪失がもたらされたことが焦点。21節の原語は動物の命の喪失を伝えるのに8語用いているが、人間の命の逝去にはただ2語で表現しているだけ。

23 ただノアと… 大洪水は悪にまみれた世には死とさばきをもたらしたが、選ばれた残りの者たちには神聖な浄化と保持となった。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約Ⅰ』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)。

Hamilton, V.P., The Book of Genesis Chs.1-17 (Eerdmans),

Mathews, K.A., Genesis 1-11:26 (Broadman),
Walke, B.K., Genesis (Zondervan).

聖書 創世記7・1～24
 タイトル 大洪水
 暗唱聖句 ノアはすべて主が命じられたようにした。 創世記7・5
 目標 ノアの時代の大洪水に、警告を受ける。

導入

(光田)

先週は、正しい信仰で神様と共に生活をしてきた全き人ノアの話でした。今日はその続きです。神様は、正しく、きよい愛のお方ですが、罪を罰さないではおかないお方でもあります。ノアの洪水の出来事とおして、神様が私たちにどんな警告を与えておられるのか学びましょう。

神様の予告

ノアの時代に人間の悪がはびこり、人間をお造りになったことを悔いられた神様は、ノアにこうおっしゃいました。「あなたと家族は箱舟に入りなさい。わたしはあなたが正しい人であると認めたからです。これから、清い動物の雄と雌を七つずつ、清くない動物からは二つずつ、空を飛ぶ鳥からも雄雌七つずつを連れてきて、生かしておきなさい。7日後に、わたしは40日40夜雨を降らせて、地上の生き物を拭い去ります」。神様は、これから行おうとされる計画を、ノアに教えてくださったのです。神様は、み言葉に聞き従う人に、直接語りかけられるのです。

箱舟の準備

舟を造っている間、空は真っ青に晴れて、雨な

ど降るようには見えませんでした。海から遠い丘の上に舟を造っているノア一家の仕事は、全く馬鹿げて見たものでしょう。ノアから神様の警告の言葉を聞いた親戚や友人、箱舟を造る手伝いをした人たちもいたはずですが、けれども、箱舟に入ったのはノアたちの家族8人だけでしたから、ノアの言葉に耳を貸す人は誰一人いなかったのです。警告を無視した人たちは、それまでと同じ気ままな生活をしていました。ノアたちは、自分たちを馬鹿にする言葉や、あざける声を聞きながら、舟を造り続けたのでしょう。

ノアは神様が命じられたことを、一つの欠けもなく準備することができました。舟は3階建てです。長さも幅も高さも、全部神様が教えてくださいました。とても大きな奇妙な形をした舟でした。けれども、どんな大嵐や大波がやってきても大丈夫なように巧みに設計されているのです。神様のご命令に従えば、自分の知恵に頼ることよりもずっとすばらしいものが出来上がります。

とうとう箱舟は完成しました。ノアはこのとき600歳でした。腰が曲がっていたのかな。目はかすんでいなかったのかなあと心配になりますが、おそらくとても元気なおじいちゃんだったのだでしょう。しかし、まだ大仕事が残っています。それは、神様が命じられた清い生き物と汚れた生き物を集め、動物たちと自分たちの食料の準備をすることです。そして、全ての準備が終わったとき、洪水は、突然起こったのです。

洪水の始まり

ノアの家族が箱舟に入ったその日、洪水が始まりました。大洪水は2月17日に起こりました。水の源が破れ、天の窓が開いて、40日40夜、雨がザーザーバケツをひっくり返したよりも激しく、どんどん降り続いたのです。あれよあれよという間に、箱舟の外に居た人たちは、その水に流され、飲み込まれてしまいました。どんなに叫んでももう手遅れでした。ノアたちでさえ、もう誰一人助けることはできません。住み慣れた家や町や道も、畑も丘もあつという間に見えなくなり、山までが水の中に消えてしまいました。箱舟だけが水に持ち上げられて、どんどん上へ上へと上っていきま

まとめ

ノアは人々に、神様が地上のものを滅ぼされるという警告を伝えましたが、聞いても信じなかった人々は皆水の中で滅びました。ペテロの第二の手紙には、今の世界は水ではなく、火によって焼き滅ぼされると予告されています。神様は、私たちが罪を悔い改めなければならぬことを教えています。イエス様は私たちの罪の身代わりに十字架にかかってくださいました。皆さんはこのことを心から信じ感謝しているでしょうか。

♪聖書はとうとい神のみことば♪

(福音こどもさんびか50)



聖書 創世記8・1～22

テーマ 箱舟

序論

(加藤)

洪水によってもたらされた水は全地を覆い、箱舟を除く全ての生き物が地上から拭い去られ、滅ぼしつくされた(7・11～24)。ここに神の、この世の罪と悪とに対する峻厳なる裁きが、頂点に達した。しかし、続く8章1節からは、神の恵みのみ業が現わされる。神は地上に満ちた水を、穏やかに退かせ、ノアと箱舟の中にいた全ての生き物を地上に帰し、新しくされた地上を保つことを約束されたのである。

一、神は水を退けられた

全地に水が満ちる中、神はノアと、箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜とを(心にとめられた)。そして神が、風を地の上に吹かせたゆえに水が退き始めた(1節)。このように、神がノアと箱舟を(心にとめられた)ことの後に、洪水による破壊は、地上の回復に転換する。8章1節は、神の回復のみわざの前奏曲である。

ここで、神がノアと箱舟を「心にとめた」のは、あらかじめノアに示した契約のご意志に基づく。(ただし、わたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと、妻と、子らの妻と共に箱舟にはいりなさい)(6・18)。

神は、ノアと結んだ恵みの約束を心に覚え、ノアと生き物を救うべく、地上の回復のみわざを開

始されたのである。

水は次第に引き始め、箱舟はアララテの山にとどまり、山々の頂が現れたが(4、5節)、更なる地上の回復が、箱舟から鳥を放つて地上の様子を伺うノアのエピソードによって、生き生きと描かれる(6～12節)。ノアによってからすやはとが放たれる中で、次第に水が退いていく様子が明らかになり、読み手もその臨場感に引き込まれる。特に、はとがくちばしにオリブの若葉をくわえて戻って来る場面は、喜ばしくもまたほほえましい。このように、神の恵みによって、とうとう洪水による水は枯れ、地は乾き、新しくされた世界が姿を現すのである(13、14節)。

二、神は命じられた

地が乾いた時、神はノアに家族と生き物を連れて箱舟を出るように命じられた(16節)。

これは神の恵みの招きである。神は暴虐が満ち、罪がはびこる地上を、洪水によってきよめつくすと同時に、地を新しくされるお方である。神はこの新しい地を、ノアとその家族のために備えられた。

しかしながら、神の招きには使命(ミッション)が伴っていた。神はノアに、共にいる全ての生き物を箱舟から連れて出て、地に群れ広がるようにすることを命じられたのである(17節)。神が洪水を起こされたのは、いたずらに地上にあるものを裁くためではなく、この世界と神との関係を正しく築き直すためであった。そこでは人間のみならず、あらゆる生き物が、神の前に祝福され、増え

広がるのである。ノアは神の祝福に与るべく、箱舟から生き物を連れて出て行った(18、19節)。

三、神は約束された

箱舟を出たノアが最初にしたのは、主に祭壇を築いて燔祭を献げることであった(20節)。ノアは神の恵みの業に、燔祭を献げることをもって正しく信仰の応答をした。

神はノアの燔祭を覚えられ、二度と人のゆえに地を呪い、すべての生き物を滅ぼすことをしないことを決心された(21節)。これは神の慈しみと憐れみによるものである。

全知の神は、たとえ洪水をもって地を一掃しても、人の心をきよめ尽くすことができないことを良くご存知であった。人が心に思い図ることが、幼い時から悪いことを知っておられたのである。それにもかかわらず、神はもはや二度と同じ方法で、生き物を殺すことなく、この地を種蒔きと刈入れ、暑さと寒さ、夏と冬、昼と夜といった変化をもつて保つことを約束されたのであった(22節)。こうして、箱舟をもつてノアと生き物たちを救われた神は、彼ら残りの者を、新しくされた地上に導き、彼らを通して、世界に新たな祝福を与えようとしたのである。

結論

神は箱舟を、新しい回復の地に導き、ノアたちに使命を与えて生かしてくださった。私たちも、救いの箱舟である十字架の恵みに与る者であることを自覚し、主の愛に応答して歩もう。

研究資料

(足立)

テキスト

1 神は…心にとめられた NIVでは、But God remembered。主によってもたらされる破壊とノアの救いと箱舟のみわざが対比されている。主が約束された(6・18、7・1)ように、神だけが箱舟にはいる8人を救う主導権をもっておられた(1ペテロ3・20)。「心にとめられた」(ザール)という表現は、ここで単に注意を払うことを意味してはいない。これは契約の言葉で、契約的な忠誠を示している(例、出エジプト20・8)。神は最初のノアへの約束(6・18)に基づいて、行動しておられる(参照8・21、9・14、15)。「覚える」という言葉は、神の先立つ契約に依拠して救いが明らかにされる場合に見いだされる。イスラエルのエジプト脱出やカナン占領に関して(例、出エジプト2・24、6・5、民数記10・9)。またアブラハムの祈りにより、ソドムとゴモラの破壊からロトが救い出される(19・29)や、神がラケルに傾聴しヨセフを誕生させるとき(30・22)。背信のイスラエルのためにモーセがとりなしたとき(出エジプト32・13)や、悔い改めた民が神に立ち返れる理由として(レビ26・42、45)。ノアへの契約の成就によって、神は契約のパートナーを信頼なさるお方としてご自身を明らかにしておられる。

4 アアラテの山 原語では複数なので、山地とも山々の一つとも理解できる。アッシリア時代のウラルトゥ(列王下19・37)と呼ばれた現トルコ東部、ロシア南部、イラン北西部と考えられる。

20 箱舟を出てノアが最初にしたことは礼拝であった。カインとアベルの時代(4・3、4)から礼拝は知られていたが、この出来事は聖書の中で祭壇が築かれるという説明つきの最初のもの。しかしノアが今まで神を礼拝してこなかったとか、これ以前に祭壇を築くことはなかったと結論づけるべきではない。ここでの礼拝は、主にささげられたもの。そして強調点は、彼の礼拝行為が信仰を意味することにある。すなわち大洪水を通してノアを持ち運ばれた神への感謝と信頼。礼拝のために主に祭壇を築くことが、族長の習慣として同じ言葉で記されている(参照、12・7、8、13・18、22・9、26・25、33・20、35・1、3、7)。ここでノアは後の族長たちの先駆けとなった。燔祭(全焼のいけにえ) 動物の一部を残すことなく犠牲としてささげることは、祭壇で全体を焼き尽くし、主にささげることを意味する。ささげる者や祭司に与えられる分が残っていないささげ物。これは主に近づく道であり、礼拝者のために贖いの効用がもたらされる(レビ1・4、ヨブ1・5)。創世記で再び燔祭(全焼のいけにえ)が見られるのは、神がアブラハムの献身を試すためにイスラをささげるよう命じた箇所(22・2、3、6、7、8、13)であるが、この場合は主への完全な献身を意味する。しかしこのノアの場合は、彼の命を守られる神への感謝を自発的に表すことと思われる。

21 主はその香はいいかおりをかいで この表現は、モーセ五書で神が犠牲と礼拝者に顧みを示す典型的な表現である(例、出エジプト29・18、レ

ビ1・9、3・16、民数記15・3)。「かく」ことの拒否は、イスラエルの礼拝に対する神の拒絶を意味する(レビ26・31、参照アモス5・21)。ノアの礼拝は、人間の罪で傷つけられた(6・6)神の心を和らげた。二度と…地をのろわない 神が3・17の呪いを撤廃されることはないが、地を再び破壊されないと約束されている(参照、6・13、イザヤ54・9)。3・17で「のろう」と訳される言葉(アール)は、反祝福を負わせること、また悲惨な境遇を意味する。ここで「のろう」と訳される言葉(カール)は、屈辱を与えることを意味する。人間の罪がさばきに値することは現に継続されているにもかかわらず、主の神聖な約束により、ノアへの恵みの契約が強調されている。人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである 大洪水そのものは人間に根本的な変化をもたらさない。しかしノアの犠牲は罪に対する神の正しい憤りを静め、神に一つの許容をもたらした。アダムの原罪は大洪水後のすべての人々にも例外なく継承されている。洪水前、罪による墮落は歴史的に最高潮に達していた(6・5)。そしてノアが犠牲をささげたことにより神の恵みの約束がもたらされたとするなら、それはノアの行いによる義ではなく、いけにえというものの中に隠されている真理の故であろう(ローマ3・25、26)。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約1』(いのちのこぶし社) Hamilton, V. P., The Book of Genesis Chs. 1-17 (Eerdmans), Mathews, K. A., Genesis 1-11:26 (Broadman), Waltke, B. K., Genesis (Zondervan).

聖書 創世記8・1～22

タイトル
暗唱聖句箱舟
神はノアと、箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜とを心にとめられた。創世記8・1
救いの箱舟は十字架であることを認める。

導入

(光田)

先週は予告されていた大洪水が起こり、地上にいたものの内、箱舟に入ったノア一家と動物たちだけが助かったところまで話しました。今日は、私たちにとって、ノアの箱舟がどのような意味をもつかを学びます。

神様の守り

大洪水の中で、箱舟に入ったノアの家族と動物たちはどのような暮らしをしていたのでしょうか。小さな動物や大きな動物がいつばい暮らしているのですから、あちこちでもこちこちでも鳴き声がしてうるさかったかもしれません。不安と不満、ストレスで皆うんざりしていたのでしょうか。逆に、神様がそれぞれにちょうど良いような環境を整えてくださって、ぐっすり眠って、驚くほど静かに過ごしていたのかもしれない。神様は、箱舟に乗ったノア一家のことだけでなく、大きな象やきりん、小さなリスやねずみのことまで心に留めていてくださったはずですよ。

水が地の上にみなぎりあふれ、見渡すかぎり広い海と広い空のほかは、舟の周りには何もありません。

せん。その後、神様が雨を止められ、風を吹かせられたので、あふれていた水はどんどん減っていききました。水は地上から引いて、150日後の7月1日には、箱舟はアララテ山の上に着きました。それから10月1日には山々の頂上が現れ始めました。

新しい地

40日経って、ノアは箱舟の窓を開きました。太陽のまぶしい光が差し込んできます。そこから一羽のからすを放ちました。飛び出して行ったからすは、どこにも下りるところがなかったのだ、あちらこちらと飛び回っていました。しばらくして、今度は鳩を放ちました。すると鳩も降りるところがなかったのだ、ノアのところに帰ってきました。それからもう7日待って、もう一度鳩を放ちました。鳩は遠くへ飛んで行き、見えなくなりました。夕方になってやっと帰って来た鳩は、口にオリブの若葉をくわえていました。それは水が引いて植物が育っている証拠です。それから7日待って鳩を飛ばすと、鳩はもう帰ってきませんでした。もう地上に降りることができそうです。

ノアが60歳になって地上の水はすっかり引きました。洪水が起こってから丸1年経った2月27日、地面は完全に乾きました。神様はノアに言われました。「あなたは妻と子どもたちとその妻と一緒に箱舟を出なさい。鳥も家畜もこのものも皆外に出なさい。そして地上に増え広がらなさい」。こうして全ての生き物は、広々とした新しい地上に再び降り立つことができました。神様のさばきから救われたのです。

感謝の礼拝

ノアは大洪水から助けられ、新しくされた地上にもう一度立つことができたことに心から感謝をしました。そこで、地上に降りたノアは、早速神様に感謝を表わすために祭壇を築きました。そして、清い獣と鳥をそこにささげたのです。神様はその香ばしいかおりをお喜びになられ、ノアにおっしゃいました。「わたしはもはや二度と人の罪ゆえにこの地をのろわない。人の心に思い図ることは幼いときから悪いからである。わたしは今回したように、もう二度と、すべての生きたものを滅ぼさない。地のある限り、種まきのときも、刈り入れのときも、暑さ寒さも、夏冬も、昼も夜もやむことはないであろう」。

箱舟に入ったものは、人も動物もみんな生きていました。神様は約束のように箱舟に入ったすべての生き物を守られたのです。長い1年間でした。普通なら病気や死ぬものがないのも当たり前ですが、どの生き物も完全に守られたのは奇跡でした。

まとめ

箱舟に入ったものだけが救われ、全て神様が予告されたとおりにになりました。このノアの箱舟の出来事は、イエス様の十字架の救いを指しています。罪と滅びから救われる方法は、ただ神様の約束を信じて従うことです。私たちは、罪を認めて告白し、イエス様の十字架が私の罪の身代わりだと信じるなら、誰でも罪を赦され救われます。イエス様を信じましょう。

♪どうしてかわかるかな♪(福音子どもさんびか4)



聖書 創世記9・1～17 テーマ 契約のじ

序論

(加藤)

洪水によって全てを一掃し、ノアとその子らを新しい回復の地に置いてくださった神は、世界との新しい関係を築くべく、ノアたちに祝福と戒めとにじの契約を与えられた。

一、新しい祝福が与えられた

神はノアとその子らを、アダムとエバに与えた同じお言葉をもって祝福された。

〈生めよ、ふえよ、地に満ちよ〉(創世記1・28、9・1)。

神のご目的は、暴虐に満ちた世界を洪水によって滅ぼしつくすことではなく、もう一度、創世の時に用いられた祝福を彼らに与え、神のご計画のために用いることであつた。神は創世の時のように(1・28)ノアたちに全ての生き物を治めるようにお命じになった(2節)。

しかしながら、その祝福は創世の時の繰り返しではなかった。神は創世記1章29節においては、人に、地の草木だけしか食することをお許しにならなかったが(1・28)、ここでは先に与えられた青草に加えて、〈全て生きて動くもの〉を食物とすることを許された(3節)。これは地に満ちようとする人間に対する、神の恵みと慈しみに満ちた譲歩であり、罪深い人間を、まるごと担っていこうとなされる神のご意志の表れであつた。

二、慎重な戒めが与えられた

しかしながら、神の新しい祝福には、人間側の守るべき大切な戒めを伴っていた。人間は、神が食べることを許した肉を、命である血のままで食べることを禁じられた(4節)。ここでは、血を流すことが、神様のみに反する特別な禁忌(してはならない、いみきうこと)として表わされる。後年、そのことはさらに、律法で明確にされ(レビ7・26、申命記12・16)、人は血を流し、命を損なうことの重さを心に刻むことになる。

また神は、特に人の血を流すものを、それが人であれ獣であれ、必ず報復することを明言された(5節)。なぜなら、神は〈自分のかたち〉に尊厳ある者として人を造られたのであり、それゆえに、人の血が流され、その命が損なわれてはならないのである(6節)。

この戒めのもとに、改めて神は、〈生めよ、ふえよ〉との祝福を与えられた(7節)。ここで神は人間に対して神の義(神との正しい関係)を求められたのである。

三、恵みの契約が与えられた

このように、神は祝福を与え、大切な戒めを与えられた後に、ノアとその子孫、そして地上にある全ての生き物との間に契約をお立てになった(8、10節)。神の約束に対するご真実はこの契約をもって示された。神はこの契約によって、全ての肉なる者は、再び洪水によって滅ぼされることのないことを約束されたのであつた(11節)。

ここで結ばれた契約は、恵みの契約である。洪水の中から、箱舟をもってノアをお救いくださった神は、無償の愛と一方的な恵みとをもって、ご自分を契約の当事者として、ノアたちと契約を結んでくださったのである。

四、契約のじ

神が立てられた契約には、一つのしるしが与えられた。それは、神とノアたち及び彼らと共にいる全ての生き物との間に、世々限りなく神が立てられた、契約のしるしとしての〈にじ〉であつた(12、13節)。

この雲の中に置かれた〈にじ〉は、神にとって、ご自分が、もはや二度と洪水をもって地上の肉なる者を滅ぼすことがないことを思い出させる約束のしるしであつた(15、16節)。そしてそれはまた、神が洪水と言うような、ご自身の破壊的なお力を行使することによって悪を滅ぼすのではなく、それとは異なるご方法をもってこの世界を救い、ご自身とこの世界との関係を永遠に保つことのご決心のしるしでもあつた。

そして人間にとつてもそのしるしは、神が永遠に人との親密な関係と交わりを望まれ、保持してくださることの保証であり、それゆえに、人間にとつて揺るぐことのない慰めと平安と希望のしるしであつた。

結論

神は契約の確かなしるしを与えてくださった。私たちはその愛の契約を覚えて感謝しよう。

研究資料

(足立)

この箇所は8・20と22を詳述している。すなわち洪水後に関する神のご計画。ここには二つの構成がある。罪深い人類への祝福(9・1と7)と契約の保証のしるし(9・8と17)。

テキスト

1 祝福して彼らに言われた ここで創造のみわざの再確認が述べられている。神が人間を祝福するのは3度目(参照1・28、5・2)で、地に満ちるよう命じられている(参照1・28、8・17)。

2 恐れおのいて、あなたがたの支配に服し

この言葉は1・28にある「治めよ」より強力であるように思われる。また人間と動物との間にある相互作用が平和的でないことを意味している(参照9・6)。人間が自発的に神に服従し、動物が人に服するのが神のみ心であった(参照イザヤ11・6と8)。しかし傲慢な人間と動物の両方は、自分たちに付与された役割を逸脱した。明らかに洪水前すべての人の行動は腐敗し(参照6・12)、動物たちは支配の枠を出て人間への恐れはなかった。人が罪を犯したにもかかわらず、神は今、人の動物への支配を確認し、高める。人間は動物世界に對して生と死の力を持つ。

3 人の常食のために、神はこの時点できよさと汚れの区別を設けておられない。生きて動くもの 推定ではあるが、既に死んだ動物を食することは禁じられていたかも知れない。後の律法では禁止(参照レビ11・40、申命記14・21)。

4 命である血のままで、食べてはならない 旧

約聖書では血は命と同等と見なされる(レビ17・11)。ここで血は動物の魂と同等である。血を食することを禁じることで、命の尊厳を教え、気ままな虐待を防ぐことを示したのだらう(参照レビ3・17、7・2と27、19・26、申命記12・1と24、サムエル上14・32と34)。

5 命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであらう 動物の血は人の常食のためには流されて良いが、人の血は殺人の償い(参照9・6)は別として、全く流されてはならない。いかなる

獣にも 人の命の代償があまりにも高価なゆえに、動物にも要求されるのだらう(参照、出エジプト21・28と29)。兄弟である人にも この命令は、アベルの血の復讐との結びつきを提示しているのであらう(参照4・8と11)。

6 人の血を流すものは、人に血を流される こ

れは義の概念を調和させている。つまりお金で殺人者を贖うことは出来ない(民数記35・31)。また人は死刑を科すべきさばきにおいて代償を要求する神の代理人である(参照1・26)。究極的には完全な人としてのイエス・キリストによる代償的贖罪に行き着く。

9 原文は、神(神ご自身)が神の契約を立てることを意味している(参照、新改訳)。これは神の宣言である。またここは6・18の内容を繰り返している。この契約は神の絶対的な約束である(参照創世記17・7、19、出エジプト6・4)。人は神が契約を立てることに對して横に並ぶことは出来ない。ここには、人と聖なるお方が成就する事柄

の間にある境界線が示されている。そしてこの契約はすべての被造物が神との先在する関係にあることを確認している。

10 すべての生き物 この契約はノアとその家族

だけでなく、すべての生き物にも与えられた。「すべての生き物」(9・10〔2回〕、12)、「すべて肉なるもの」(9・11、15、17)、「すべて肉なるあらゆる生き物」(9・15、16)、以上の繰り返しが合計8回ある。箱舟に入れられていた動物たちも、この一方的な恵みによる契約の受け取り手である。無慈悲な犯罪の責任を動物に負わせるためだけではなく、神は動物たちを契約保証の取り決めの中にもお入れになった。動物たちは聖書の経済活動において名譽な役割を担っている。彼らは悔い改めを求められる者たちの中にすら名を連ねている(ヨナ3・7と8)。しかし動物たちは実際には契約を受け入れるわけではない。

11 神は再び地を洪水で滅ぼさない。これは8・21に基づくもの。

12と13 神はしるし によってご自分の契約を証明される。アブラハムとの契約には、割礼(創世記17・11)、シナイでのイスラエルとの場合は、安息日(出エジプト31・13と17)、キリストと新約の民とは、杯(ルカ22・20)。ノアとの契約のしるしは虹(9・13、14、16)。これまでも虹は存在しただらうが、この時契約に用いられた。

参考図書 松本任弘「創世記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Hamilton, V. P., The Book of Genesis Chs. 1-17 (Eerdmans), Walke, B. K., Genesis (Zondervan)。

聖書 創世記9・1～17

タイトル 契約のじ

暗唱聖句 わたしは雲の中に、にじを置く。

目 標 これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。創世記9・13
神の愛の契約を覚える。

導入 (光田)

私たちはいろいろな人と約束を交わしますが、神様も私たちに約束をしておられます。今日は、神様がノアと交わされた約束から、神様の愛を学びましょう。

神様の祝福

地上に降りたノアたちに向かって、神様は祝福して「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。すべての動物、鳥、這うもの、魚までもが、あなたがたを恐れて言うことを聞く」と言われました。神様は、人間がどんどん増え広がることを喜ばれるのです。しかも、人間には特別に、地上の全てのものを治める仕事を与えられました。地球の環境を守り、資源を大切にすることも人間の務めです。

また、神様はこうも言われました。「全ての生き物はあなたがたの食べ物となる。前には青草が食べ物であったが、これからはこれらの生き物をみな与える。しかし、肉を血の付いたままで食べてはならない。血は命だからである」。神様は、箱舟での生活が始まる前に、食べ物の準備も命令されましたが、これから新しい地で生活するために必

要な食物の心配もしてくださいました。洪水が起さるまでは、青草だけが食物でした。これからは肉も食べることが許され、豊かな食事ができるようになりました。神様は私たちがおいしい食事を摂ることも喜んでくださいます。ただ、血をそのまま食べてはならないと、禁止命令も加えられています。

そして神様は、「あなたがたの血を流すものには、わたしが報復する。人の血を流すものは、人に血を流される。神が自分のかたちに人を造られたからである。あなたがたは、生めよ、ふえよ、地に群がり、地上にふえよ」と、人の命大切にされることを教えられました。神様はノアの家族から始まる、人間の新しい出発を喜ばれました。

約束の虹

そして神様はノアとその家族に言われました。「わたしはあなたがたとあなたがたの後の子孫とに契約を立てる。またあなたがたと共にいる生き物、鳥、家畜、地上の動物に至るまで、箱舟から出たもの全てに対して契約を結ぼう。この契約によって、全ての肉なるものは洪水によって再び滅ぼされず、世々限りなく立てられる契約を破ることはない」。そして神様は契約のしるしを与えるとされました。そのしるしが、空にかかる虹です。

こうして神様は、「わたしが雲を地の上に起こすときに、虹は雲の中に現れる。こうして、わたしは、あなたがたと、すべての肉なる生き物との間に立てた契約を思い起こす。それだから、水は二度と息のあるものを滅ぼさない。虹が雲の中に現

れるとき、わたしはこれを見て、契約を思い起こす」。そして、「これがわたしと地にあるすべての肉なるものとの間に、わたしが立てた契約である」とおっしゃいました。

神様の警告を聞かなかった人間は、動物たちと共に水の中に滅ぼされました。しかし神様は多くの人たちが滅んでしまったことを、どんなに悲しまれたことでしょう。だからこそ、もう二度と同じように水で滅ぼすことはしないと、契約を立てられたのです。

まとめ

神様は罪を憎めますが、私たち罪人を愛してください。ノアの時代に洪水による滅びが起されたのは、神様が人を憎まれたからではなく、罪を憎まれたからです。

同じように、私たちも罪をもったままでは、滅びてしまいます。このために、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架で死なれ、三日目によみがえられたのです。ノアには虹の約束が与えられました。私たちには、イエス様の十字架が神様の愛のしるしです。これからは虹を見るとき、ノアと結ばれた神様の愛の約束を思い出すと共に、イエス様の十字架の愛に感謝しましょう。

イエス様が予告された再臨の日が近づいています。私たちは、いつどんなときにイエス様がおいでになられても良いように、イエス様を愛し従う生活をしましょう。そして、イエス様の十字架の愛を皆に伝えましょう。

♪うみのように♪ (福音子どもさんびか87)



聖書 IIコリント5・11～19

テーマ 新しい命

序論

(加藤)

私たちがクリスチャン生活を歩む上で大切な事は、私たちがどのような存在（ビーイング）であるかをしっかりと理解し、そのあり方にふさわしく生きることである。パウロはそのことをよく知っていた。

一、新しく造られた者

パウロにとってキリスト者は「新しく造られた者」（新共同訳では「新しく創造された者」）である。新しく造られたキリスト者はそれまでの「古いもの」とは全く異なる存在である。「古いもの」とは、墮落したこの世の性質に服して存在する、神との本来あるべき関係を失い永遠の滅びに定められたすべてである。しかし今や神のみわざにより、古いものは過ぎ去り、全てが新しくなった（17節）。キリスト者は、この神の新創造の御業によってたらされる、来るべき世に属する新創造物である。

しかしここで忘れてはならないことは「だれでもキリストにあるならば」というフレーズである。神による人間への新創造のみわざは、十字架につけられたイエス・キリストをとおしてなされる（ガラ6・14～16）。人はイエス・キリストを信じる信仰によって救われ新生する（エペソ2・1～10）。そしてキリストのよみがえりの命に与るキリスト者は、文字通りキリストに属する者として、御霊

の働きの内に終末を待ち望みつつ、キリストの体たる教会を形成し神の新創造に参与する者となる。新しく造られた者は、初めから終わりまでキリストの内（エンクリスト）にあり続けるのである。

二、キリストの愛に迫られる者

新創造物たるキリスト者は、イエス・キリストとの新しい関係に入る。パウロもまさしくそうであった。もはやパウロは、以前のようにキリストを「肉によつて」、即ち「人間的な標準」（新改訳）で知ることをしない（16節）。パウロにとってキリストは歴史的認識や信仰の対象というだけではなく、深い人格的な関係を結ぶべきお方である。

人格的な関係とは、互いの自発的な愛を基礎に置くべきものであるが、ここでパウロが体験する「キリストの愛」とは、まさしくキリストのご人格の内より湧き出る、尽きる事のない自己を与える愛の奔流であった。パウロはキリストとの深い人格的な交わりの中にあつて、この「キリストの愛」に強く迫られた（新改訳は「取り囲んでいる」、新共同訳は「駆り立てている」）のである。

キリストとの交わりの内にひしひしと感ぜられるこの絶えざるキリストの愛の迫りのゆえに、パウロはもはやキリストの前に傍観者たることを自分に許すことが出来ない。キリストの愛に答えて、「自分のために死んでよみがえってくださったかたのために」生きるべき存在であることをはっきりと自覚するのである。キリストの愛の迫りとは、新しく造られたキリスト者が、主との絶えざる人

格的交わりの中で与えられる宣教の力の源泉であり、パウロはこの力を受けて自らの奉仕に勤しむのである（11～13節）。

三、和解の福音を委ねられている者

新創造物たるキリスト者は、神との新しい関係に入る。それは神との和解である。

ローマ人への手紙によれば、人は神に対するかたくなな、悔い改めない心のゆえに、神の怒りをその身に積んでいる者（ローマ2・5）であり、神に対して敵対する者であった（ローマ5・10）。しかし神は罪過の責任を私たち人間に負わせることをせず、御子イエス・キリストの死によって（18節、ローマ5・10）、私たちをご自分に和解させてくださったのである。

しかもさらに、神はキリストによって神との和解に与った私たちに、和解の務めを授けてくださった。即ち、神と敵対した者たちに和解をもたらす「和解の福音」を、私たちに委ねてくださったのである（18、19節）。

それゆえに神の新創造物たるキリスト者は、和解の福音を委ねられた「キリストの使者」（5・20）である。パウロはそのことを深く自覚し、和解の福音を携えて宣教のわざに励んだのである。

結論

パウロは自らが神によって新しく創造された者であること自覚した。私たちも新しい命に生きる者としてふさわしく、キリストの愛に答えて和解の福音を宣べ伝える者となろう。

研究資料

(木村)

前の10節で「キリストのさばき」について記したパウロは、11～19節において、人々がそのさばきに備えることができるように、キリストの愛に捕えられて奉仕していることを記している。

テキスト

11 このように 前の10節を受けている。主の恐るべきこと 人は皆、「キリストのさばきの座の前に」立ち、すべてをご存じである神のさばきを受ける。それを思うことによって生じる恐れのことであるが、恐怖ではなく、主を第一としてあがめ、畏れかしこむ畏敬の念のことである。パウロはこの厳粛な事実を知るゆえ、福音に従って歩むよう人々に説き勧めるのであり、このパウロの思いは、すでに神のみまえには明らかにになっているが、さらに、あなたがたの良心にも明らかになるように、知ってもらえるようにと望むのである。

12 前節のパウロの望みは、決して自己推薦しようとする ためのものではない(Ⅱコリント3:1、10:12、18)。心を誇るのではなくつわだけを誇る(直訳は、顔を誇る) 偽使徒たちに対抗して、パウロを真の使徒として誇る機会を コリント教会に持たせたいからである。顔の誇りは所詮表面的で、すぐに化けの皮がはがれるもので、「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上16:7)。

13 偽使徒たちは、伝道熱心で、幻を見たと言うパウロのことを気が狂っている(エクシステミー。エクスタシーの語源) と非難中傷していた(Ⅱコリント12:1～4、使徒16:9、18:9、26:24他)。それに対してパウロは、気が狂っているように見える

のは、キリストの十字架に現された神の愛に対する感動から生じる情熱のためであり、**気が確か**に見えるのは、コリント教会を健全に建て上げようとする配慮のためであると反論する。要するにパウロは、神と人のために全く献身していたのである。

14 パウロを前節のような使徒に造り上げたのは、**キリストの愛** 以外の何ものでもない。**強く迫っている** (スネコー) 共につかむ、圧迫する、駆り立てる、の意。現在時制は、これがパウロの生涯を貫く継続した習慣であることを表している。十字架上で死ぬほどパウロを愛されたキリストの贖罪愛が、パウロに強く迫り、命がけの福音宣教へと駆り立てているのである(Ⅰコリント9:16)。

ひとりの人がすべての人のために死んだ キリストの十字架上での身代わりの死こそ、新約聖書の中心的教義である。キリストにある者は、キリストの死と復活に合一されるのである。

15 前節のキリストの愛を体験した者は、もはやかつてのように自分中心の生き方はできない。自分のために死んでよみがえったかたのために、生きる という高貴な義務へと駆り立てられる(ローマ14:7～9)。

16 **それだから** 結論を引き出すための接続詞(ホーステ)。だれをも肉によって(新改訳「人間的な標準で」知ることはすまい キリストの愛によって人生の変革を体験したパウロは、キリスト抜きの人間的な価値基準で人を判断することはしなくなった。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても これは、必ずしもパウロが回心前キリストを実際に目撃していたことを意味しているわけではない。回心前は、キリストをもユダヤ教

指導者たちと同じ人間的な標準で理解し、教会を迫害していたが(使徒26:9～11)、今は違う。

17 原文には、接続詞(ホーステ)が冒頭にあり、第二の結論を引き出している。**だれでもキリストにあるならば** (エン・クリストー) パウロの主要な救済論的表現で、パウロ書簡に172回登場する。キリスト支配の領域内にある、キリストに合一する、の意。**その人は新しく造られた者である** (直訳は、新しい創造) 悔い改めと信仰による新生は、神の万物更新、新創造のみわざである。**古いものは過ぎ去った** (パレールセン) アオリスト時制で、古いものが一度限り完全に過ぎ去ったことを表している。**すべてが新しくなった** (ゲゴネン) 完了時制で、新しくなった状態が継続していることを表している(ガラテヤ6:15)。「修理・補修・改造ではない。新創造である」(中島彰)。

18～19 **和解させ** 人間は皆、罪ゆえに神と敵対関係にあるが、キリストが全人類の罪を負って十字架上で死なれたゆえ、十字架を信じる者は神と和解し、**罪過の責任** を負わせられない。「和解のドラマの主体は神ご自身です。和解の主人公はキリストです。和解の対象は世です。和解の内容は、違反行為の責めを人々に負わせないことです。和解の使者は、私たち(パウロとその仲間、すべてのクリスチャンも含まれる)です」(竿代照夫)。

参考図書 尾山令仁「コリント人への手紙 第二」『新聖書注解 新約2』(いのちのことば社、竿代照夫「コリント人への手紙 第一、第二」『新約聖書講解シリーズ』(イムヌエル総合伝道出版局)M.J.Harris『2 Corinthians: The Expositor's Bible Commentary, Vol.10 Zondervan』他

聖書

タイトル

暗唱聖句

目標

目

Ⅱコリント5・11～19
新しい命（フリーデー）
だれでもキリストにあるならば、
その人は新しく造られた者である。
Ⅱコリント5・17
キリストにあつて人は新創造されることを知る。

導入

（木村純）

長い夏休みが終わりました。新学期を迎え、また新しい気持ちでスタートしましょう。

以前、神様が天と地にあるすべてのものを造られたことを学びましたね。実は神様は、今も私たち人間の内に新しい創造の御業をなしてくださるお方なのです。

新創造の目的

人間はもともと、神様を中心に、神様と交わり、神様を愛し、神様に従って生きるように造られました。けれども、アダムが罪を犯したときから、人は自分勝手に生きる者となつてしまいました。神様がそのような私たちを、もう一度新しく造つてくださるのは、人間がもはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえられたイエス様のために生きるようになるためです。この手紙を書いたパウロも、以前は自分を中心に、自分の力で、自分を誇って生きていた人でしたが、イエス様を信じたときから造り変えられ、イエス様のために生きる人となりました。では、神様による新

しい創造の御業は、どのような方法によって私たちの内になされるのでしょうか。

新創造の方法

罪をもったままでは、神様のために生きることができません。それゆえ、罪のないイエス様が人間の罪の全てを背負って十字架にかかつてくださったのです。私たちの罪の全てをイエス様は十字架において完全に処分してくださいました。罪の全ては十字架によって過ぎ去ってしまいました。イエス様の十字架を信じるその人の内に、神様は新しい命を与えてくださいます。よみがえられたイエス様の命によって、全てが新しくなりました。その命の力は、私たち人間をイエス様と同じ姿（イエス様に似る者）に日々造り変えてくださいます。「内なる人は日々新たに新しくされていく」（Ⅱコリント4・16）。神様による新創造の御業は、なんとすばらしいことでしょう。

新創造された者の使命

イエス様を信じた人々は、神様と和解（仲直り）できた人です。神様はその人に、イエス様こそ唯一まことの救い主であることを伝える務めを委ねてくださいます。新しく造り変えられたパウロも、その後、命をかけて人々にイエス様を伝えていきました。

例話

本田弘慈という先生を皆さんは知っていますか。先生は学生の頃、お友だちに誘われて教会に行き、初めて聖書のお話を聞きました。教会に通ううちに、自分が罪人であり、言っていることとされていることが違う、偽善者だということがわかってきました。そしてある夜、教会でお祈りをしているとき、

両親や兄弟に対して愛がなかったこと、お家や学校のお金を盗んでいたことなど、いろんな罪が示されました。それを神様の前に告白して、イエス・キリストの十字架は自分の罪のためだったと心より信じたのです。その時から先生の心は変えられ、自分のために生きるのではなく、イエス様のために生きる人となりました。そして、日本の国だけでなく、世界にまでイエス様をお伝えする伝道者となったのです（『ここに愛がある』本田弘慈著）。

まとめ

皆さんの中に、こんな自分は嫌だ、新しい自分になりたいと思っているお友だちはいませんか。そのために例えば、良いことをいっぱいする、服装や髪型を変えてみる、読書などで自分自身を高める、楽しいことをして気持ちをリフレッシュさせるなど、いろんなことをしてきたかもしれませんが、でも私たちは誰でも、どんなことをやっても、自分で自分の心を変えていくことはできません。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」。イエス様を救い主と信じて、神様とのいのちの交わりを持つならば、その人は新しく造られた者となるのです。天地を造られたまことの神様だけが、イエス様による新しい創造の御業を今も私たちの内になすことができます、ただ一人のお方なのです。

私たちもイエス様によって新しく造り変えていただいて、イエス様のために生きる者とならせていただきますように。

♪だれでもキリストのうちにいるなら♪

（ゴスペルミュージック66）



聖書 ヨハネ14・1～7

テーマ まことの命

序論

(加藤)

神の御子イエス・キリストは父なる神様の御旨に従って、御子を信じる者に永遠の命を与えるためにこの世に来てくださった。十字架の死はキリストの救いのみわざのクライマックスであるが、その苦難を前にして、主イエスは弟子たちに永遠の命に至る道を示し励ました。

一、あなたがたのために場所を用意しに行く

弟子たちにとつて最後の晩餐は、心騒がずにはおれない時であった。エルサレム入城後にご自分のご受難を予告された主イエスは(ヨハネ12章)、ここでユダの裏切りと(13・21～30)、「ご自身が栄光を受けて世を去るべきことを告げられた(13・31～33)。又ペテロがご自身を裏切ることをも示された(13・36～38)。これを聞いた弟子たちの心は不安と混乱に陥ったことであろう。

しかしそのような中、主イエスは弟子たちに、心騒がず、神を信じ、主イエスを信じるようにと命じられる(1節)。そして彼らを諭すようにして、父の家にある、弟子たちが住むための場所を用意しに行くことを教えられた。今は、弟子たちがついて行く事は出来ないが、用意が出来たならば、主が再び来て、弟子たちを迎えてくださるという約束であった(2～4節)。

ここで主イエスが約束された住まいの場所が(わたしの父の家)という、きわめて個人的な関係を

示す言葉で表現されていることは重要である。私たちは、何より天国が父なる神との温かい交わりの場所であることを知らなければならぬ。主イエスはその安らぎの場所に、彼らを迎え入れるために栄光をお受けになるのである。

二、わたしは道であり、真理であり、命である

しかしながらトマスはなおも主イエスに次のように問いかける。(主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう)。

このトマスの問いに、主イエスは直ちに(わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のもとに行くことはできない)と答え、ご自身に注意を喚起し、トマスの投げかけた答えがキリストご自身の内にあることを示される。即ち神の御子イエス・キリストこそが、父のもとに行く事の出来る唯一の道であり、このお方以外に父に至る方法はないのである。しかもキリストは、父に至る道であると同時に、父を啓示する真理であり(1・18)、父のみに従ってキリストを信じる者たちに永遠の命を与える命そのもの(3・16、11・25)である。

それゆえに弟子たちが求めるべきは、キリストを知ることである。人がもし御子を知っているならば、父なる神も知ったのである。その意味でこれまでキリストと共にあり、キリストとの交わりの中にあつた弟子たちは、今はもうキリストの父なる神を知っており、それゆえにキリストを通して、すでに神を見たのである(7節)。

三、わたしを見たものは父を見たのである

しかしトマスに続いてピリポが主にした問いかけは、(主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さい)と、わたしたちは満足します)であった。

この問いに、イエスは嘆息をこめて(こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかつていないのか。わたしを見た者は父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか)(14・9)と言われ、改めてご自身と父との関係を示される。

即ち御子が父におり、父が御子におられるのであり、それゆえに、御子を通して弟子たちに語られた言葉は、御子自身のものではなく、御子の内におられる父のみわざである(14・10)。父なる神は、何より御子イエス・キリストを通して、ご自身を啓示してくださるのである(1・18)。

ゆえに、主イエスは弟子たちに、(わたしが父におり、父がわたしにおられることを)信じるように、もしそれが出来なければ、主イエスの(みわざそのもの)によつて、御子を信じるようにと命じられるのである(14・11)。

結論

キリストのみ側に仕えた弟子たちでも、御父と御子との関係を悟り、キリストを父に至る唯一の道と信じる事は容易ではなかった。しかしキリストは弟子たちが自身を信じるように促される。なぜなら神の御子イエス・キリストを信じるこそこそが、まことの命を得る唯一の道だからである。

研究資料

(木村)

第13～17章には、最後の晩餐^{ばんさん}の席上でイエスが弟子たちに語られた告別説教が記されている。14・15・17は、イエスが世を去ることを聞いて動揺したペテロとイエスの問答(13・36～38)によって中断されていた本筋に戻ると同時に、「どこへおいでになるのですか」とのペテロの質問により深く答えられた箇所である。第一に「場所を用意しに行く」ためであり(15・11節)、第二に「真理の御霊」によって「あなたがたのところに帰って来る」ためである(12・21節)。

テキスト

1 心を騒がせないがよい 否定を伴う現在時制は、進行中の行動を中止することを表している。すなわち、イエスが地上を離れ去る時が近いことを聞かされた弟子たちは(13・33)、ずっと心を騒がせていたのである。イエスご自身、ラザロの死に直面したとき(11・33)、一粒の麦としての死を予告したとき(12・27)、ユダの裏切りを予告したとき(13・21)、心を騒がせられたことがある。そのイエスが今、「あなたがたは、心を騒がせないがよい」と言われ、続いて、**神を信じ、またわたしを信じなさい**と言われるのである。どちらも現在時制で、信じ続けなさい、の意。神とイエスを信じ続けるならば、心を騒がせる必要などなくなるのである。その根拠が2・3節である。

2 父の家 天にある神の住まいのこと。**すまい**(モネー) この語は、他に14・23に登場するのみである。とどまる、つながる、の意の動詞(メノー)

の派生語で、複数形名詞。居住する場所、の意。信じる者たちが一切の労苦から解放され、父なる神と共に安息する場所のことである。複数形は、場所の十分さと同時に、その安息の十全性をも表しているのであろう。天国は、うさぎ小屋とも住宅難とも全く無縁な場所である。**用意しに行くのだから** 目的達成のため、誰かを先に遣わすのが当時の習慣であった(マルコ14・12・13他)。「その幕の内に、イエスは…わたしたちのためにさきがけとなつて、はいられたのである」(ヘブル6・20)とあるように、イエスは信じる者たちの先駆けである。

3 またきて 再臨のこと。イエスが地上を去ることは、心を騒がせることではない。なぜなら、信じる者たちが永遠に神と共に住む場所を用意するためであり、そして用意ができれば再臨され、そこに迎え入れてくださるからである。

4・5 トマス 本書中、他に、忠実で勇敢な弟子として(11・16)、疑い深い弟子(20・25)として登場する。

6 わたしは…である(エゴー・エイミ) 神がご自身を顕現される際に用いられる定型句で、マタイ福音書に5回、マルコに3回、ルカに4回、ヨハネに29回登場する(ヨハネ6・35、8・12、10・7、9、11、11・25、15・1他)。**道**(ヘー・ホドス) **であり** イエスこそ神のもとへ行くための「新しい生きた道」(ヘブル10・20)そのものである。「われわれは、ある人にその行き先について、言葉でどのようにしてそこに行くかを、注意深く詳細な指導を与えて導くことができるだろう。われわれは、ある人のために地図を準備してやり、地図が

彼に道順と、それについての詳しい説明を与えてくれるだろう。しかしたとえ、最も注意深い指導でも、たとえ最上の地図でさえ、ある人は迷ってしまうことがある。最上の方法はその人に、『わたしがその道を知っている、一緒に来なさい、わたしがあなたをそこに連れて行つてあげよう』と言うことである。すると道に迷うことはなくなってしまう。その人にとっては、われわれが道になつたのである。そのようにイエスは、われわれにその道について話されたのみではなかった。彼はその道について教えられたのみではなく、彼が道である。彼にあつては、だれも神の前に出る道を見出せない者はいない」(バークレー)。**真理**(ヘー・アレーセイア) **であり** イエスこそ、「めぐみとまこと」「真理」と同語)とに満ち」(1・14)、「神をあらわした」(1・18)真理の権化、神の究極の啓示を具現されたお方である。**命**(ヘー・ゾーエー) **である** イエスこそ、「言に命があつた」(1・4)、「よみがえりであり、命」(11・25)そのものであり、信じる者たちに永遠の命を付与されるお方である。

7 イエスを真に前節のとおり知る者は、父なる神を知り、見ることに他ならない。イエスが、「ひとり子なる神だけが、神をあらわした」(1・18)、「わたしと父とは一つである」(10・30)、「わたしを見た者は、父を見たのである」(14・9)と言われたとおりである。

参考図書 榊原康夫『ヨハネ福音書講解 下巻』(小峯書店)、W・バークレー『信仰のキリストⅡ』(新教出版社)・D.A.Carson『The Gospel According to John』(Eerdmans)他

聖書 ヨハネ14・1〜7
 タイトル まことの命
 暗唱聖句 わたしは道であり、真理であり、命である。ヨハネ14・6
 目 標 道であり、真理であり、命であるキリストにつながる。

導入

(木村純)

皆さんはどのように自己紹介するでしょうか。スポーツが得意、音楽が好き、将来は〇〇になりたい。でもちよつと恥ずかしくて、胸がドキドキしますね。今日は、イエス様がご自分の紹介をされた聖書のみ言葉について学びます。

わたしは道である

先週も学んだように、神様が人間を造られたとき、人間はいつも神様のそばにいて、神様と交わって生きるように造られました。けれども、人間が神様の戒めに従わないで罪を犯したときから、神様との交わりは失われ、神様から遠く離れて生きる者となってしまいました。それ以来、人間は神様に近づくために、今もなおいろんな努力を続けています。例えば、立派な行いをしたり、自分の体を打ちたいて修行したり、あるいはたくさんのお金や物をささげたりします。でもそれは、神様に近づく道ではありません。イエス様は、「わたしは道である」と言われました。羊飼いのもとを離れて迷子になった羊は、自分で元の場所に戻ることはできません。羊飼いに連れ帰ってもらったに助かる道はないのです。同じように人間は、

自分で神様のもとへ帰ることはできません。それゆえ、まことの羊飼いであるイエス様がこの世に来てくださった、人間の罪のために十字架にかかり、私たちが父なる神様のもとへ帰る道を開いてくださったのです。

わたしは真理である

皆さんは、誰にでも、いつの時代にも、どこでも、絶対に変えることのない真理って何だと思いますか。その真理を知るならば、私たちはしっかりと土台に立って、迷うことなく生きていくことができますね。イエス様は、「わたしは真理である」と言われました。真理の源は神様ご自身であり、そのみ言葉です。「わたしを見た者は、父を見たのである」(9節)と言われたように、その神様を私たちに見えるように現してくださったのがイエス様なのです。

わたしは命である

小学生のあるクラスのプリントに、「あなたの宝物は何ですか」という質問がありました。皆さんなら、何と答えますか。そこには、家族、お友だち、ゲームなどいろいろありましたが、あるお友だちは「命」と書いていました。一人一人に与えられた命は何より大切なものですね。でも、最初の人間が罪を犯したとき以来、人間は神様と交わることでできる一番大切な命を失ってしまいました。その霊の命をどうしたら再び得ることができるのでしょうか。イエス様は、「わたしは命である」と言われました。イエス様こそ命そのものであられるお方です。そして、自分の罪を認めて、神様に罪を告白し、私の罪のために死なれたイエス

ス様を救い主と信じる人の内に、神様は新しい霊の命を与えてくださいます。イエス様を通して、神様との命の交わりが回復されるのです。

例話

アメリカの第22代大統領クリーブランドがまだ学生だった頃、お友だちと一緒に夜道を歩いていました。教会の前に来たとき、クリーブランドは教会の集会に出たいと思い、その中に入りました。でもお友だちは教会には入らず、そのまま遊びに行ってしまうました。このことが二人のその後の道を大きく分けてしまったのです。何年も経って、そのお友だちは罪を重ねて刑務所の中にいました。その獄中で一枚の紙を手に入れました。それは、若い頃の友人であったクリーブランドが大統領に当選したというニュースだったのです。

まとめ

私たちの前には、神様から離れてそのまま滅びに行く道か、イエス様を信じて天国へ行く道かのどちらかしがあります。永遠が決まる道を間違えると大変なことになります。イエス様は、弟子たちを離れて神様のもとへ帰る日が近くなったとき、わたしはあなたがたのために場所を用意しに行くと言われました。そして用意ができたならば、再び迎えに来ると約束されました。それは天国の住まいのことです。イエス様を信じる人は、その天国の住まいに住むことができるのです。「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われたイエス様につながるって、私たちも命の道を歩み続けましょう。

♪歩こうイエスの道を♪ (ブレイズワールド15)



聖書 ヨハネ3・1～15

テーマ 永遠の命

序論

(加藤)

主イエスとニコデモとの会話は、ヨハネの福音書の主題である永遠の命に直接言及する初めての個所である。私たちはこの所から、真の救いと永遠の命をもたらすキリストの十字架について学びたい。

一、神の国に入る条件

ニコデモはパリサイ人の一人であり、ユダヤ人の指導者であった(1節)。このニコデモが主イエスの所に来たのは、主イエスが「神からこられた教師」であることを認めた故であった(2節)。ニコデモは主イエスの行い(しるし)と教えに心を開き好意を持つユダヤ人の一人であった。

この時ニコデモがどのような条件でイエスのもとに来たのかは不明である。話しは、むしろ主イエスの方から切り出される。しかしその言葉は、ニコデモにとっても全ての人のにとっても、ないがしろに出来ない本質的な救いの問題を提示するものであった。

「よくよくあなたに言うておく、だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。パリサイ人は律法を守ることによって神の国に入ることを教える者であった。しかし主イエスが提示された、神の国に入る条件は、それとは全く違って「新しく生れる」ことであった。

二、ニコデモの躓き

主イエスのお言葉にニコデモは困惑する。「新しく生れる」という意味を計りかねたニコデモは「人は年をとってから生まれることがどうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができませんようか」と問い返した。この問いに対して主イエスは「新しく生まれる」ことの意味を教え始められる。それは、

① 水と霊とから生まれることであった。

主イエスはまず、人は、水と御霊のバプテスマにあずかり、霊的に生まれ変わるべきことを強く暗示された(1・33、3・5)。

② 御霊の主導によるみわざであった。

主イエスは霊から生まれる事柄を、「風」(プニユーマ、ギリシャ語で「霊」と言う意味でも使われる)の描写をもつて表わし、生まれ変わることが自由の御霊の主導による神秘的なみわざであり、人間の理解を超えるものであることを示された(8節)。しかしニコデモは主イエスの言葉を聞いてなお「どうして、そんなことがあり得ますようか」と、霊的に生まれ変わることを理解することが出来なかった。

三、荒野の蛇

ニコデモの不理解を嘆きつつも(10節)、主イエスは、新生をもたらす主ご自身に、話題の焦点を移される。ここで主イエスは、ご自身が「天から下ってきた者、すなわち人の子」、即ち神的存在であることを示しつつ、さらにご自身のなすべき働

きを旧約の例をもって示された。それは神の裁きのために蛇にかまれ、死に瀕したイスラエルの民を救うために、モーセによって上げられた荒野の蛇であった(民数記21・4～9)。

「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように人の子もまた上げられなければならない」。これは主イエスが、ご自身の予型たる荒野の蛇をもって例えられた、十字架に上げられるご自身のお姿である。モーセが荒野で蛇を上げたように、主イエス・キリストも十字架に上げられ「なければならなかった」。そしてそれは「彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るため」であった。

ここに於いて、初めに主イエスがニコデモに言われた新生の内容が私たちに、明らかにされる。キリストが最初に言われた「新しく生まれる」(3、5、7節)ことと、「永遠の命を得る」(15、16節)ことは同義と言える。そして人が本当に新しく生まれ、永遠の命を得るためには、どうしてもキリストが天から下って十字架に上げられなければならない。キリストの十字架こそが、信じる全ての人に真の新生と永遠の命を与え得るものだからである。その故に、イスラエルの民が青銅の蛇を仰ぎ見て生きたように(民数記21・9)、キリストを信じる私たちも十字架を仰ぎ見るのである。

結論

十字架のキリストは、真に新生と永遠の命の道を私たちに示された。故に私たちも十字架を仰ぎ見て生きる者となろう。

研究資料

(木村)

「多くの人々は…しるしを見て、イエスの名を信じた」が、イエスはその信仰が本物ではないことを見抜いておられた(2・23〜24)。その代表としてニコデモが登場する。

テキスト

1 ニコデモ 本書にのみ登場する人物。この会談を機に彼はイエスとの関係を次第に深め、イエスを擁護するようになり(7・50〜51)、イエスの遺体を葬った(19・39〜40)。彼は、律法を厳格に解釈し、忠実に守ろうとするパリサイ人であり、ユダヤ人の指導者(アルコーン)、すなわちユダヤの最高議会サンヘドリンの議員であった。

2 夜 ニコデモの立場上、人々の目を恐れてのことであると同時に、彼の現在の霊的暗黒状態と、真の光を渴き求める心をも暗示しているのであろう。しるし(セーメイオン) 奇跡に込められた霊的な意味を讀者に悟らせるため、ヨハネは「奇跡」ではなく「しるし」という語を用いた。神が一緒にいないなら ペテロは、「このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら」と語っている(使徒10・38)。

3〜4 よくよく(アメン・アメン)あなたに言っておく 重要な宣言をする際、イエスがお用いになった言い回し。新しく(アノーセン) 上から、初めから、新たに、再び、の意。3・31、19・11、23では、上から と訳している。イエスは、聖霊によって上から 生まれるという新生を意図しておられたが、ニコデモは、もう一度、母の胎にはいつて(新しく)生れる と理解した。これにより、ニコデモ

の思い違いはなお一層明らかとなった。学識豊かなパリサイ人も、神の国に関してはまるで門外漢であった。異邦人がユダヤ教に改宗するということはよく知っていたが、ユダヤ人が生まれ変わる必要があるとは考えもつかなかったのである。神の国 本書では、ここだけに登場。神の恵みによる支配のことで、イエスの宣教の中心であった(マルコ1・15)。イエスの来臨によって、神の国はこの世で、信じる者の内ですでに始まっているが(ルカ17・20〜21)、その完成は再臨後のことである。

しかし、パリサイ派は律法の遵守によって到来すると考え、熱心党は武力によって実現し得ると考えていた。ここでは、永遠の命(15節)に置き換えることもできよう(マルコ10・17と10・23を比較)。

5 水と霊(プニユーマ) 何を指しているのか諸説あるが、要は新生における聖霊の働きを指しているのであろう(エゼキエル36・25〜27、テトス3・5)。

6 肉と霊 とは、パウロ書簡のような「罪と死との法則」と「いのちの御霊の法則」との対立としてではなく(ローマ8・1〜17、ガラテヤ5・16〜26)、地上的な肉体の誕生と、天的な聖霊による新生との対比として用いている。

7〜8 風(プニユーマ。霊と同語) ギリシャ語のプニユーマも、ヘブル語のルアッハも、霊、風の意味をもつ。風は目に見えず、どこからきて、どこへ行くかは知らない が、風の音、風に揺れる木等でその存在と働きがわかる。同様に聖霊も目には見えないが、思いのままに 働き、人々を新生へと導くことによって、その存在と働きが認められるのであって、不思議に思うことは及ばない。

9〜11 教師(ホ・ディダスカロス) 冠詞がついているのは、偉大な教師であることの強調。

12 地上のこと である新生を信じないならば、十字架と復活、昇天等の神のご計画である天上のこと などなおさら信じられない。

13 天から下ってきた者 イエスはしばしばご自身をこう紹介された。人の子 イエスご自身が指すときに好んで用いられた呼称で、王、さばき主、苦難の僕としてのメシヤを意味している。(ダニエル7・13〜14、イザヤ42・1〜53・12)。

14 上げられなければならない(ヒュプソウ) イエスの十字架刑を意味する本書特有の表現で(8・28、12・32、34)、復活・昇天をも含む。主につぶやいたイスラエルの民は蛇にかまれて苦しんだが、主がモーセに言われたとおり、さおに上げられた青銅の蛇を仰ぎ見た者は生きるようにされた(民数記21・4〜9、イザヤ45・22)。同様に、全人類の罪の身代わりとして十字架に上げられたイエスを信じて仰ぐ者は救われるのである。

15 永遠の命を得る(現在時制) 永遠に存在される神ご自身の命のことであるが、イエスにあつて神の永遠の命を共有するのである(5・26、17・3、1ヨハネ5・12)。しかも死んだ後に与えられる命ではなく、信じたその瞬間から与えられる命である。「信じる者は永遠の命を得ている(現在時制)」(6・47、新共同訳)。

参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解新約1(いのちのことば社)』、山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書注解(いのちのことば社)』、D.A. Carson『The Gospel According to John』(Eerdmans) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句ヨハネ3・1～15
永遠の命それは彼を信じる者が、すべて
永遠の命を得るためである。

目 標

ヨハネ3・15
荒野の蛇は十字架を示し、真の
救いと命を与えるものと信じる。

導入

(木村純)

今日のみ言葉の中にある永遠の命とはどのような命なのか。そして、それはどうしたら得ることができるのでしょうか。

指導者ニコデモ

ある夜イエス様のもとに、ニコデモという人が訪ねて来ました。ニコデモはユダヤの議員の一人で、神様の律法を一生懸命守り行う人でした。みんなから尊敬される立派な先生でした。高い身分があり、財産があり、人を教える立派な先生が、何のためにイエス様を訪ねて来たのでしょうか。実は、ニコデモの心の底には、自分は一生懸命神様の律法を守り行っているつもりだけれど、神様に受け入れていただいているのだろうか、自分はこのままで本当に天国へ行けるのだろうかなど、誰にも相談できない深い悩みがあったからです。イエス様なら自分の悩みに答えてくれるかもしれないと思い、訪ねて来たのです。

新しく生まれる

そのニコデモにイエス様は、あなたは新しく生まれなければ、神の国を見ることも、そこに入る

こともできない、と実に不思議なことを言われました。新しく生まれるとは、上から神の霊によってもう一度生まれる必要があるということですが、ニコデモはその意味を悟ることができませんでしたが、イエス様は風のたとえでお話しになりました。風は目には見えませんが、風の音や風に揺れる木などで、その存在と働きがわかるように、新しく生まれることも目には見えなくても、その人の言葉や態度、生活によって現されるようになる、とイエス様は教えられました。そして、私たちが新しく生まれるために神様が備えてくださった救いについて、続いてお話しになりました。

荒野の蛇

昔イスラエルの民がモーセに率いられてエジプトの国を出て、約束の地に着くまでの間、荒野をさまよっていました。その間民は絶えず不平を言い、神様に逆らっていました。神様はその罰として毒蛇を送り、蛇にかまれて多くの人々が倒れました。モーセが祈ると神様は、「火のへびを造って、それをさおの上に掛けなさい。すべてのかまれた者が仰いで、それを見るならば生きる」と言われました。神様の言葉を信じて、青銅の蛇を仰いだ人々は助かったのです。この青銅の蛇は、イエス・キリストの十字架を示しています。私たちが、自分の罪を神様の前に詫言びして、イエス様の十字架は私の罪のためであったと信じて仰ぐならば、私たちの罪は赦され、永遠の滅びから救われるのです。そして、その人は神の霊によって新しく生まれ、神様との交わりの中に生きる永遠の命をいただくことができます。

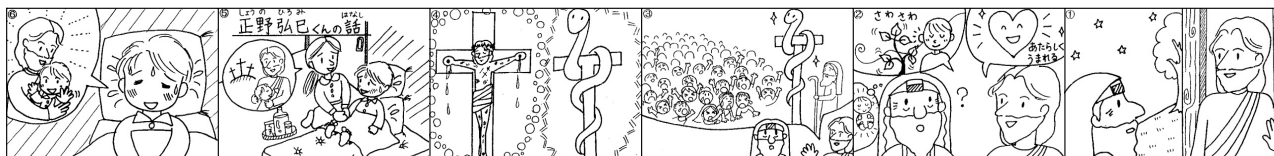
例話

天国へ行った三歳の正野弘巳くんのお話です。弘巳くんは、ある日突然熱を出し、急性の心臓弁膜症という病気になり、腎臓も悪くなってしまうました。お水や大好きな食べ物も制限しなければなりません。横になると心臓を圧迫して苦しむので、壁にもたれて座ったまま毎日眠らなければなりません。弘巳くんは、どんなに痛くても苦しくても、ただの一度もそれを訴えることはありませんでした。亡くなる前の日まで、お母さんが話してくれるイエス様のことを熱心に聞き、讃美歌を歌っていました。そして亡くなる日の朝、「お母ちゃん、もうついでこんでいいよ。みんなこんでいいよ。イエス様が来なさったから、ぼく行くよ。みんなさようなら、さようなら」。そう言って、神様のおられる天国へ召されていきました。《神は愛なり―正野サカエの生涯と信仰より―》

まとめ

「それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。小さな小さな三歳の弘巳くんも、お母さんから聖書のお話を聞いて、素直にイエス様を信じて永遠の命をいただき、天国へ行ったのです。皆さんは、死に打ち勝つことのできるこの永遠の命を持っているでしょうか。私たちが永遠の命をいただいて神様と共に生きるために、イエス様は十字架で命を捨ててくださいました。十字架を仰ぎ見れば生きる、と神様は今日も私たち一人一人に呼びかけておられます。神様の呼びかけに素直にお応えしましょう。

♪み国に着くとき♪ (ゴスペルミュージック91)



聖書 ヨハネ4・1～26 テーマ 命の泉

序論

(加藤)

先週のみ言葉の箇所において、主イエスによってニコデモに表わされた永遠の命は、場所を移してサマリヤの女に示される。主イエスはサマリヤの女に霊的な命の関心を呼び起こし、命を与えるお方であるご自身を明らかにされるのであった。

一、その水を私にください

この箇所は主イエスとサマリヤの女との出会いから始まる。サマリヤのスカルと言う町においてになった主イエスは、旅の疲れを覚え、水を汲みに来た一人のサマリヤの女に、「水を飲ませて下さい」と声をかけられた。

女はサマリヤ人と交際をしないはずのこのユダヤ人の言葉に驚き、逆に「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」と言葉を返すが、それに対して主イエスがお答えになった言葉は意外なものであった。「もし、あなたが神の賜物のことを知り、また、「水を飲ませてくれ」と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。

水を求めると言う文脈からはずれた主イエスのこのお返事は、水を与える者ともう者との立場を逆転させる。女はむしろ自分の方が、神の賜物を

としての生ける水を求めるべきことを暗示される。ここで女は疑問を投げかける。「その生ける水を、どこから手に入れるのですか。あなたは…父ヤコブよりも、偉いかなのですか」。目の前のユダヤ人と、サマリヤ人の崇敬するヤコブを比べるのは、この女の考えられる限りの精一杯の考えであったろうが、主イエスは更に続けられる。

「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、…その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。

主イエスが与える生ける水とは、いつまでも渴くことがない、永遠の命に至る水である。女は主イエスの言われる生ける水を完全には理解することが出来ない。しかし、主イエスのお言葉によって、確かに彼女の心にその水への渇きが起こされたのであった。「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにぐみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。

二、私には夫はありません

しかし女の求めに対して、主イエスは答えず、女の夫を呼んで連れてくるように女に命じられる(16節)。「わたしには夫はありません」と、嘘ではないが曖昧な返答をする女に、主イエスはなお、その女の過去に5人の夫があり、今の相手は夫ではないことを明らかにする。女はもはやこのお方に自分の全てが見抜かれていることを悟る(16～19節)。

三、わたしが、それである

主イエスに対する崇敬の念が起こされた女は、主イエスを「わたしはあなたを預言者と見ます」と認めるが、主イエスはそれ以上のお方であった。サマリヤの女には、なお取り払われなければならない観念の枠があった。それはサマリヤ人としてゲリジム山で礼拝をすべきであるという宗教的観念であった。しかし、主イエスは、「あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」として、その枠を取り払い、今こそ、霊とまことをもって父を礼拝すべき時であることを示される(21～24節)。

サマリヤ人としての宗教的な観念の枠を取り払われた女は、「そのかたがこられたならば、わたしたちに、いつさいのことを知らせて下さるでしょう」と、メシヤ待望の告白をするが、主イエスはそこで、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」として、今、現在、女の前に立つご自身こそが、キリストと呼ばれるメシヤであることを明らかにされるのであった。

結論

主イエスはサマリヤの女に、永遠の命に至る生ける水を飲むことを勧め、その水を与えてくださるお方のご自身であることを示された。故にサマリヤの女がなすべきことはキリストを信じることであった。私たちも、キリストを信じて永遠の命の泉を内にいただく者となろう。

研究資料

(木村)

サマリヤの女がイエスを救い主と信じた出来事を通して、イエスによる救いが全人類のためのものであり、霊とまことによる新しい礼拝をもたらすものであることを示している。

テキスト

133 バプテスマをお授けになったのではなくこの時点ではまだイエスは、パリサイ人との不必要な摩擦と争いを避けておられた。

4 サマリヤ 紀元前721年、北王国イスラエルの首都サマリヤはアッシリヤに滅ぼされ、多くのユダヤ人がアッシリヤに捕囚となり、アッシリヤからは多くの異邦人が移住してきた(列王下17・6、24)。その異邦人と残ったユダヤ人との雑婚によってサマリヤ人は混血民族となり、民族的純血を重んじるユダヤ人はサマリヤ人を蔑視し、両者は対立するようになった。サマリヤ人はモーセ五書のみを正典とし、独自の神殿をゲリジム山に建設して礼拝していた。通過しなければならなかった

パレスチナは、北からガリラヤ地方、サマリヤ地方、ユダヤ地方に区分される。当時、ユダヤからガリラヤへ行く場合、まっすぐ北上してサマリヤを通過する最短ルートではなく、ヨルダン川を渡ってヨルダン渓谷沿いの険しい道を北上し、再びヨルダン川を渡るという迂回ルートを選択した。それは、サマリヤを避けるためであった(9節)。イエスはこの時、距離的必然からではなく、神のご計画に基づく必然からサマリヤを通過しなければならなかった。

657 イエスは旅の疲れを覚えて 真の神であ

ると同時に真の人であるイエスの人間性を示している(ヘブル4・15)。昼の十二時ころ 水汲みは、日中の暑さを避けて朝か夕方に行うのが普通であったから(創世記24・11)、人目を避ける事情が彼女にあったことを意味している。イエスはこの女に：言われた ユダヤ教のラビが女性に話しかけることはなかった上(27節)、ユダヤ人がサマリヤ人に水を求めることもあり得なかった。

9 交際していなかった(スンクラオマイ。取引する、共に使用する、の意) ユダヤ人は、汚れを避けるため、サマリヤ人とは器を共に使用しなかった。それゆえ、くむ物を持たずに(11節)、飲ませてくれとおっしゃる イエスの言葉を聞いたとき、彼女は驚いたに違いない。

10515 神の賜物 何を指しているのか諸説あるが、生ける水、すなわち神からの賜物としての聖霊を指しているのではない(7・37、39)。生ける水 流水・湧き水のヘブル語的表現であるが、イエスが与える水は、いつまでも、かわくことがないばかりか：その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがる という点で、まさに生ける水 であつた。ところが、彼女は霊的意味をなおも汲み取ることができず、物質的必要性からその水を求めた。

16520 あなたの夫を呼びに行つて… というイエスの言葉は彼女の肺腑を衝き、眠っていた良心を呼び覚ました。不道德な生活の指摘に一言の弁解もせず、わたしはあなたを預言者と見ます と告白した(ユダヤ人「9節」↓「主よ」11節↓「ヤコブよりも、偉いかた」12節↓「預言者」と変化)。さらに、礼拝すべき場所 についてユダヤ人とサマ

リヤ人との間に論争があつたが、イエスこそ真の解決を与えてくださるお方と信じて真剣に尋ねた。

23524 特定の場所においてではなく、いつでもどこでも、霊(プニユーマ)とまこと(アレーセイア)とをもって父を礼拝する時が来る。これは、礼拝する者の心構えについてではなく、神の側の働きについて語られているのではない。すなわち、神から与えられる御霊と、神の自己啓示である真理との働きによって、はじめて霊なる神を真に礼拝することができるということであろう(3・5、14・17、15・26、16・13、1・17、14・6他)。人は神に造られたゆえ、本来、神は父であり、人間は神の子である。しかしアダムの墮罪以来、人間は神から遠く離れ、「悪魔の子」(イヨハネ3・10)、「怒りの子」(エペソ2・3)となつた。そのような罪人が神の子とされ(1・12)、聖なる神を父として礼拝することをおこなったのが、イエスの十字架と復活による救いである(ローマ8・14、16、ガラテヤ4・6)。この恩寵にお応えして、自分自身を「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげ」ることこそ、「霊的な礼拝である」(ローマ12・1)。

26 このわたしが、それである(エゴ・エイミ) イエスは、ご自分がメシヤであることを宣言された(9・37)。このイエスとの出会いによって明らかに変えられた彼女は、イエスを人々に証しするようになった(28、30節)。

参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解新約1』(いのちのことば社)、山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、D.A.Carson『The Gospel According to John』(Eerdmans) 他

聖書 ヨハネ4・1～26

タイトル

命の泉

暗唱聖句

わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。

ヨハネ4・14

目標

汚れた人生にもキリストを信じて命の泉がわくことを知る。

導入

(木村純)

水は、人間にとっても、動物や植物にとっても、生きていくためになくてはならないものです。今は、お店でも水が売られています。イエス様は、渴くことのない生ける水を与えと言われました。その不思議な生ける水とは、いったいどのような水なのでしょう。

生ける水

昼の暑い時に、ひとりの女性が井戸に水をくみにやって来ました。その女性は、神様に喜ばれない罪の生活をしていたため、だからも相手にされない孤独な女性でした。その女性にイエス様はご自分のほうから、「水を飲ませて下さい」と声をかけられました。話をしている中でイエス様はこの女性に、わたしが与える生ける水を飲むならば決して渴くことがなく、命の泉がわき上がると言われました。それは、イエス様を信じる者に与えられる御霊による新しい命のことです。御霊は私たちの内をきよめ、絶えることのない神様との交わりの中に生きることができるようになってください。

ます。そこから命の泉はわき上がってくるのです。

生ける水をいただく条件

この女性は、その不思議な水を私にくださいとイエス様にお願ひしました。でもそのためには、解決されなければならぬ問題がありました。イエス様は、「あなたの夫を呼びに行つて、ここに連れてきなさい」と言われました。その言葉は女性の心を突き刺しました。なぜならこの人は、神様の戒めを破る結婚生活を繰り返していたからです。この女性は、「わたしには夫はありません」と自分の罪の生活を正直にイエスの前に認めて告白しました。

生ける水をいただいた結果

この女性は続いて、神様を礼拝する場所についてイエス様に尋ねました。イエス様は、場所に関係なくどこでも、だれであつても、父なる神様を礼拝できる時が来ると教えられました。またこの女性は、キリストと呼ばれる救い主が来てくださるのを長い間ずっと待っていました。イエス様にそのことを話すと、イエス様は、「あなたと話をしてこのことをわたしが、それである」と、ご自分こそ救い主であることを明らかにされました。自分の罪を正直に神様の前に認めて告白したとき、この女性は救い主と出会い、真に神様を礼拝する者となり、その喜びにあふれて、自分から人々にイエス様を証する者へと変えられていったのです。

例話

ある小学校三年生の男の子が、友だちと一緒にお店でかき氷を食べた後、お金を払わないで逃げ出してしまいました。その男の子はそれからずっと、夏

になつてかき氷の旗を見るたびに、心が締め付けられるように痛みました。「ぼくは悪いことをして逃げている。死んだ後、神様にさばかれたらどうしよう。地獄に落とされるかもしれない」と苦しみ続けました。中学三年生になったとき、イエス・キリストの十字架によつて自分の罪が赦されることを知り、神様の前に罪を告白して、イエス様を救い主と信じました。罪赦された安心と喜びが心にわき上がってきました。その後、お店を探して、勇気を出して謝り、お金を返しました。うれしくて、うれしくて天にも上るような気持ちで家に帰りました(岸義紘著『仲良く生きるために』)。

まとめ

皆さんも、過去に犯した自分の罪、今ある自分の罪に苦しんではいませんか。昔、お店のものを黙って盗んだことがある、家族や友だちにひどいことを言つて傷つけてしまった、あるいは悪いと思つてもやめられない罪はないですか。罪を持つままです。思い出すたびに心はズキズキ痛みます。罪の中に生活しては、なんの喜びもわき上がってくることはありません。私たちも、今日の話の女性のように、自分の罪を正直に神様の前に認めて告白し、イエス様の十字架を信じましょう。その時、神様は私たちの内にも罪赦された平安と喜び、神様との交わりの中に生きることが出来る命の泉を与えてくださいます。そしてその人は、喜んで神様を礼拝し、イエス様をお伝えする人へと変えられていくのです。

♪喜び広げよう♪

(プレイスワールド26)



聖書 ヨハネ8・1～12
テーマ 命の光

序論

(加藤)

イエス・キリストは全ての人を照らす真の光として世に來られた(ヨハネ1・9)。故にイエス・キリストと出会い、主イエスのご人格に触れる者は、闇の中を歩む人生から解放され、キリストにある新しい命に生きる者とされるのである。ここでは姦淫の女と彼女を訴える人々を通して、光に入れられる者と、光なるお方の下から去る者の姿が対照的に描かれる。

一、姦淫の女を訴える者たち

主イエスはエルサレムの宮での一日の教えを終え、オリブ山で夜を明かされた後、もう一度宮に入って人々に教えられた(7・53～8・2)。すると、律法学者たちやパリサイ人たちが姦淫の現場で捕えた一人の女を連れてきて、彼女を立たせ、その刑罰をどうすべきかを主イエスに問うた。ここで彼らはモーセの律法を引き合いに出して主イエスに迫るが、もちろんこれは主イエスを試して訴える口実を得るための、彼らの巧みな計略であった(3～6節)。

このときすでに、これまで主イエスのなされたみ業や証しによって、主イエスとユダヤ人たちの緊張は高まっていた。前章でも、宮でご自身を証された主イエスを捕えようとする者が出ていた(7・44)。また、祭司長たちやパリサイ人たちの間で、主イエスを捕えようとする動きに、イエスと会う

たニコデモが、律法にきちんと従って、主イエスの言い分を聞き、主イエスのしたことの裁きをするようにと弁護を行っている(7・45～51)。翌日になされた姦淫の女を用いての彼らの主イエスに対する問いかけは、このニコデモの言葉に呼応する。

二、キリストの答え

律法学者とパリサイ人の問いに対して主イエスはまず沈黙をもって答えられる(6節)。神の沈黙に自ら悟り得る者は幸いである。しかし、彼らは身をかがめて地面に何かを書きつつ、沈黙を守られる主イエスになお問いかけ続ける。

そこで、とうとう身を起こして発せられた主イエスのお言葉は、〈あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい〉であった。そう言つて、また地面にものを書き続けられた主であったが、この主のたった一言で、主イエスと彼らの立場は逆転するのである。

もはや彼らは姦淫の女の罪を問う立場ではなく、律法の前に自らの罪を問われる立場となった。それは世の光たるイエス・キリストの前に立つ者すべての必然である。主イエスのお言葉は、彼らの問いに対する切り返しと言うよりも、むしろ世の光たるご自身の性質によつてもたらされた。

キリストのみ言葉の光に探られた者たちは、自分自身の隠れた罪を自覚し、もはや自分に姦淫の女を裁く何の資格もないことを認めて、年寄りから、一人一人その場を去った。結果として、残念なことに、彼らの誰一人光なるお方の下に留まる

ことはなかった。光なる主の下に留まったのは他ならぬ姦淫の女ただ一人であった。(9節)

三、姦淫の女の前に立つキリスト

今や姦淫の女の前に立つお方は主お一人であるが、主イエスは女に〈みんなはどこにいるのか。あなたを罰する者はなかったのか〉とお問いになられる。そして、〈主よ、だれもごさいません〉と答える女に、〈わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように〉と言われるのである(10、11節)。

ここで罪の女は、キリストの温かい愛のご人格に触れる者となった。キリストは女を裁くことによつてではなく、女を裁きから解放することによつて新しい命の生活に導かれる。女に律法を強いるのではなく、女に罪を犯すことのない生き方を促すことによつて、新しい命の生活に導かれる。キリストとの人格的な交わりが、女の心に真の改革をもたらし、女の人生を闇から光へと導くのである。故に12節でご自身を現した主イエスのお言葉は、姦淫の女にとつて現実のものとなったのである。

〈わたしは世の光である。わたしに従つて来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう〉。

結論

キリストは世の光である。私たちも、暗やみを歩く者を導いてくださるキリストを受け入れ、キリストにある新しい命に生きる者となろう。

研究資料

(木村)

7・53〜8・11には「」が付いている。それは、多くの有力な写本にはないこと、文体や用語が本書とは異なっていること等から、もともと本書にはなかったというのが一致した結論だからである。「わたしはだれもさばかない」(8・15)ことの例証として、ずっと後にここに挿入されたのではないかと思われる。だからと言って、この記事の価値が全くなくなってしまっているわけではない。いかにもイエスらしい方法・言葉で、もともと福音書にはなかったものではあっても、これが歴史上の事実であるということは少しも疑われていない。

テキスト

3 姦淫 の罪は、十戒の第7戒で禁じられており(出エジプト20・14)、違反した場合は石打ちによる死刑に処せられた(レビ20・10、申命記22・22〜24)。

4〜6 律法学者やパリサイ人の狙いは、女性をさばくことよりも、イエスをためして、訴える口実を得る ことにあった。当然男性も連行されるべきところ、ここにその姿はないので、この姦淫自体、イエスを訴えるために仕組まれた罠であつたかもしれない。モーセは律法の中で、**こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか** もしイエスが彼女を赦せと言われたならば、彼らは、イエスをモーセの律法を破る者として訴えるつもりであつた。逆にもしいイエスが彼女を石で打ち殺せと言われたならば、日頃人々に愛を説いてきたのに、その教えと矛盾することになるので、イエスの評判を落とすことができる。また、当時ユダヤはローマ帝国の支配下にあり、

ユダヤには死刑執行権がなかったので、イエスが石で打ち殺せと命じるならば、ローマ帝国の法秩序を無視する反逆者として訴えることができた。どちらの答えをしてもイエスには不利になるように巧妙に仕組まれた罠であつた。イエスは**身をかがめて、指で地面に何か書いておられた** イエスが何を書いておられたのか諸説あるが(出エジプト23・1bの言葉、これから言う7節の言葉他)、大切なのは何を書いたかではなく、その動作である。イエスは、彼らの冷酷、非情、傲慢な態度に対して反省を促すために沈黙されたのではないか。

7〜8 罪のない者(アナマルテートス) 新約聖書のここだけにしか用いられていない語。罪を犯すことができない者という意味もある。世の中にそのような人間など、人となられた神の御子イエス以外に一人もない。自分たちは他の人々より律法を厳格に守ってきたと普段から自負していた彼らに、この言葉は効果てきめんであつた。また**身をかがめて、地面に物を書きつづけられた** 何を書いておられたのか不明である(出エジプト23・7の言葉か)。「イエスの言葉に従って誰かが女に向かつて石を投げたら、その石はイエスにも当たるのではないか。イエスは立って、自分もさばく人々の輪の中に入っていくようなことはされなかった。傍観者にはならなかった。むしろ、あくまで罪と辱めの只中にある女と同じところにとどまり、あなたのさばきをこの身に一緒に受けようとも言うっておられるかようだ。キリストは今もそのように、弱っている者、罪の中にある者と共に生きようとしておられる。私たちがそのよう

に生きておられるキリストに気づかないのは、罪の苦しみや自分の弱さに嘆いている人々からあまりにも離れたところで暮らしているからではないだろうか」(『牧会ジャーナルNo.19』)。

9 年寄から始めて、ひとりひとり出て行き(未完了時制) 年長者ほど多くの罪、汚れを知っているものである。彼女を責める資格など全くない同じ罪人であることに気づいた彼らは、一人また一人と列をなして去って行った。

10〜11 わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように 心砕けて罪を悔い改め、再び罪を犯すまいと神のあわれみにする者に対しては、神はその罪を赦してくださるお方であり(5・14、詩篇51・17)、この宣告の背後には、十字架への道をひたすら歩むイエスの決意があつた。

12 わたしは…である(エゴ・エイミ。9月9日研究資料参照) 「祭(仮庵の祭、7・2)の終りの大事な日」(7・37)、イエスは「さいせん箱のそばで語られた」(8・20)。さいせん箱はエルサレム神殿の婦人の庭にあり、仮庵の祭の最初の夜、そこに置かれた四つの金の燭台に点火され、その光はエルサレムの隅々を照らしたと言われる。イエスこそ罪の暗黒を征服し、永遠の命を与える**世の光、命の光**なのである(イザヤ9・2、ヨハネ1・4〜5、9、9・5、12・46)。

参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解 新約1』(いのちのことば社)、榊原康夫「ヨハネ福音書 講解 中巻」(小峯書店)、『牧会ジャーナルNo.19』(いのちのことば社) D.A. Carson 『The Gospel According to John』(Eerdmans) 他

聖書

ヨハネ8・1〜12

タイトル

命の光

暗唱聖句

わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。ヨハネ8・12
暗やみを歩く者を光に導いてくださるキリストを受け入れる。

目 標

導入

(木村純)

み言葉の中にある「やみ」と「光」と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。「やみ」＝暗い、恐い、絶望、滅び。「光」＝明るい、暖かい、安心、希望、命。では、皆さんは今、どちらの中に生活しているでしょうか。

罪を犯した女の人

朝早くイエス様が宮で人々にお話をしていると、律法学者やパリサイ人たちが、神様の戒めを破る罪を犯した女の人を連れて来ました。それは、ユダヤの国の律法によるならば、石打ちの死刑にあたるものでした。女の人はどんな気持ちでそこにいたのでしょうか。きつと恥ずかしく、また恐ろしく、死も覚悟していたかもしれません。この女の人の心も生活も、暗闇の中だったのです。

罪を責める人々

律法学者たちは、イエス様にこの女をどうしたらよいかと尋ねました。それは、イエス様を試し、訴えるための彼らの作戦だったのです。問い続ける彼らにイエス様はただ一言、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよ

い」と言われ、身をかがめられました。自分は義しい、大丈夫だと思っていた彼らの心に、イエス様の一言が矢のように突き刺さりました。この世で一番明るい太陽の光も人間の心を照らすことはできませんが、神様のみ言葉は人間の心の奥底までも照らし、罪を示すのです。一番年をとっていた人たちから次々とその場を離れて行き、とうとう誰もいなくなっていました。彼らは、イエス様のもとから離れ、再び暗闇の中に去って行ったのです。

罪を赦すイエス様

イエス様という光の前に、ただ一人逃げることもなく、ありのままの姿でとどまっていた女性を、イエス様は一言も責めることはありませんでした。それどころか、「わたしもあなたを罰しない(罪に定めない)」と、その罪を赦してくださいました。罪をお嫌いになる神様が、この女性の罪を赦してくださいましたのは、この女性の罪も全部背負ってやがて死なれる、イエス様の十字架があつたからなのです。イエス様の愛と温かさ包まれたこの女性、どんなにうれしかったことでしょう。この女性もイエス様によって、罪という暗闇から明るい光の中に生きる者へと変えられていったのです。

例話

赤ちゃんの時に両親に捨てられ、施設で育った女の子がいました。大きくなって、自分は親に捨てられた子どもだという事実を知らされたとき、その心の中は、「私を捨てた父と母は誰なのか」という両親に対する恨みしかありませんでした。ところがある日、彼女は施設の中で宣教師と出会い、

イエス様の十字架の話の聞きまし。宣教師は、「イエス様はあなたの気持ちに本当はわかる唯一の方です。なぜなら、イエス様も捨てられたお方だからです。あなたを愛し、あなたを罪と滅びから救うために十字架につけられ、父なる神様に捨てられたお方だからです」と話してくれました。私たちの罪を背負われたために、神様に見捨てられ十字架にかかれたイエス様を信じたときから、彼女の人生は見事に変わりました。神を恨み、人を憎んでばかりいた彼女は、「私は生涯、この神様の愛を伝える人になりたい」と決意し、今もイエス様のために奉仕しておられます。

まとめ

皆さんの中にも、罪という暗闇はありませんか。だれかを憎み、赦せない心、自分を守るためにいつてしまう嘘やごまかし、悪いとわかっていてもやめることのできない習慣はありませんか。光だけが暗やみを追い出すことができます。世の光なるイエス様を信じ、心に受け入れるとき、私たちも暗闇から明るい光の中に生きる者となることができます。そして、よみがえられたイエス様は、私たちに罪に打ち勝つ力を与えてくださいます。「わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。命の光なるイエス様をあなたの心の中に受け入れましょう。そして、いつも光であるイエス様と共に歩みましょう。

(ノア・ミュージック・ミニストーリー68)



牧羊ひろば

「わたしの小羊を養いなさい」

明石人丸教会

明石人丸教会の教会学校は、本校と分校（貴崎分校、西明石分校、大久保伝道所）で活動を進めております。本校は、聖日午前9時より礼拝が始まります。本校は、信徒の子どもが中心です。礼拝の後、幼稚科、1年生、3年生、4年生、6年生とそれぞれに分かれて分級をします。

小学生の場合はワークブックを使っています。地域に住む子どもたちへの伝道が課題です。毎月第4聖日は、子どもたちの礼拝への意識が高まるようにとの願いから、子どもと大人との合同礼拝を守っています。貴崎分校は、聖日の朝、地域の会館を借りて行っています。就学前の子どもから高学年の子どもたちが、毎週元気よく集まっています。

西明石分校は、水曜日の午後、公民館を借りて行っています。少数ではあっても、恵みを求めて来る子どもの姿は大きな励みです。

大久保伝道所での教会学校は、一昨年の夏に完成した伝道所で、聖日に大人と共に礼拝をささげ



た後、分級を行っています。月に一度、土曜日の午後に子ども大会、絵本の読み聞かせをしています。子ども大会では会堂の敷地内で、季節によって、サツマイモやイチゴ摘みをしています。新しい子どもが加えられ、地域に根を張りつつあります。なお、これまで永きにわたり（50年）続けられた山の下分校は、伝道所の近くにあることから、今年から伝道所に統合しました。



次に、おもな行事をご紹介します。

＊新年餅つき
大会 年が明けて1月に、人丸教会、大久保伝道所それぞれで行っています。つきたてのお餅は、子どもにも大人にも好評です。

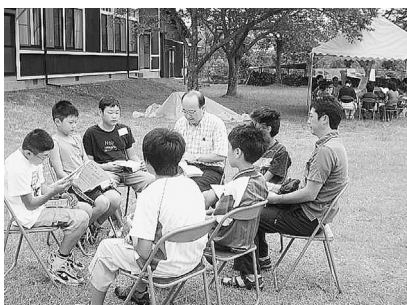
＊春の遠足
例年、桜の咲く頃に出かけます。土曜日の半日を楽しく過ごします。

＊野外礼拝 教会から歩いて数分の所に大蔵海岸（おおくら）があります。海岸近くの公園で礼拝をささげた後、磯遊びをします。

＊サマーキャンプ（夏期学校） 毎年2泊3日、青垣キャンプ場を会場に、本校・分校合同で行います。



野外礼拝



＊芋掘り大会 一
昨年より、教会員の知人の方の畑をお借りして、秋の半日、楽しく行っています。必死で土をいじりながら、芋を掘っている子ども们的姿はほほえましいものです。

＊文化祭 人丸教



前ファイヤーキャンプ夏
す。神の造られた自然の中で繰り広げられるキャンプに、初めて参加する子どもも心を開き、福音に耳を傾けます。子どものために教会会堂でサマーキャンプに臨んでいま



夏キャンプあまご村



クリスマス

会では、毎年秋に
礼拝後に文化祭
を開いています。
作品の展示とと
もに音楽会をし
ます。地域の方々
も参加しておら
れます。子どもた

さげます。
＊クリスマス

本校、それぞれの分校ごとに、クリスマスの集いを開いています。本校では、一部の礼拝に続いて二部の祝会。聖誕劇にトーンチャイムや影絵などを取り入れています。

毎月第4聖日の午後、CS教師会を開いています。はじめに『実を結ぶ教会学校（改訂版）』（金井由信師著）を一章ずつ輪読した後、牧師によるまとめ、協議に移ります。本校、各分校の現状を語り合った後、行事の確認をします。

「CSは救霊の最前線である」と言われます。私たち教師は、子どもの中から明確な救いにあずかる魂が起こされるよう祈り願っています。種まきの段階ではありますが、主が必ず実を結ばせてくださると信じてやみません。「わたしの小羊を養いなさい」と、召して立たせてくださっている主に寄り頼みつつ主の業に励んでいます。

牧師 宮崎 徹

おわりに

『牧羊者』二〇〇七年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には、転任や聖会などで多忙の中を執筆していただき、心から感謝します。

信徒の子どものみで行われている教会学校や、信徒の子どもさえもいなくなり教会学校を閉鎖した教会もあると報告を受けました。原因は家庭の事情や地域活動などさまざまです。CS局として新しい生徒への伝道方策について、各教会の実情をお聞きし、報告し合い話し合つて、今後の教会学校の活動に生かしたいと願っています。

今後も「牧羊者」が大いに用いられ、各教会の教会学校が祝福されるように、引き続きお祈りください。終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解	鎌野 善三	加藤 郁生
研究資料	足立 宏	木村 勝志
メッセージ例	松浦 みち子	光田 隆代
ワーク	鎌野 幸	吉田 美穂
		木村 純子

中 高 科
フッシュカード
土屋 直子
藤井 洋美
加藤 清
朝川 清英
上森 恭子
長谷川 ひさい
長尾 秀紀
杉山 俊一

み言葉カード 陰山 恭子
子ども聖書日課 小野 淳子

また、監修をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師、光田隆代師、朝川小織師、打ち込みをしてくださった小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、陰にあつてお手伝いくださった兄弟姉妹、また、発送とワーク印刷をされたベラ力出版の方々、印刷会社のアクトと菱三印刷に心から感謝いたします。

聖書教育教案誌
牧羊者

二〇〇七年度 II 卷

二〇〇七年六月一日發行

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画・監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三十一番一
電話(〇七八)五七五―五五一

FAX (〇七八)五七五—六六一

印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六一三九六

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済